HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ソ連のアフガニスタン侵攻 : 対外政策決定の分析
Author(s)	金, 成浩; Kim, Sung-Ho
Citation	スラヴ研究, 43, 129-166
Issue Date	1996
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5246
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113405.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ソ連のアフガニスタン侵攻

── 対外政策決定の分析 ──

金（キム）　成浩（ソンホ）

I．はじめに

1979年12月のソ連のアフガニスタン侵攻は、米ソ関係の冷却化と軍拡路線を加速化させ、「デタント」の時代から「新冷戦」の時代へと転換をもたらす事件となった。さらに、9年間にわたるアフガニスタンでの戦争は、ソ連自体にも大きな損害をもたらした。ソ連はアフガニスタンでの戦争に合計600億ルーブルもの巨費を投じ(1)、79年12月から89年2月の撤退までにアフガニスタン戦争に62万人の兵力を投入し、そのうち、死亡者は病死を含め約1万4500人にのぼった(2)。この戦争が外交においても経済においてもソ連に大きな損害をもたらしたことは確かであろう。

ではソ連はなぜアフガニスタンに侵攻したのだろうか。ソ連がアフガニスタン侵攻を決断した理由については、今までさまざまな説明がなされてきたが、見解の一致はなく定説なるものはいまだ定まっていない。さらに、その決定過程に至っては、資料不足からその研究は困難となっていた。だが、ゴルバチョフ（М.Горбачев）のグラスノスチ政策以後、アフガニスタン侵攻に関する資料や回想録がソ連国内でかなり発表されるようになった。また、アフガニスタン問題への関心の高さから多くの調査記事がソ連の新聞雑誌に登場した。そのため、いままで定説のなかった侵攻の決定理由にもさらには決定過程に関してもアプローチが可能となった。特に、アフガニスタン侵攻の政策決定過程の分析は、今まで謎の多かったソ連の対外政策決定に関するケーススタディとして大いに参考になると思われる。

本稿では、これら近年公表されたソ連側の新資料や回想録に留意しながら、「ソ連は、なぜ（政策決定要因）、どのように（政策決定過程）、アフガニスタン侵攻を決定したのか？」という命題にアプローチを試みた。ここでは、国際関係・国内組織・個人（政策決定者）の三つのレベルで、それぞれ分析を行う。先行研究では、資料の不足から国際関係レベルでの分析が主流となってきたが(3)、これに国内組織・個人（政策決定者）レベルでの分析を加え、上記の命題に対して重層的アプローチを行うことにより、結論の正確さを高めることを試みている。

II．アフガニスタン侵攻の決定

第1節　アフガニスタン侵攻に関する分析方法

本節では、「なぜ、また、どのような決定過程を経て、ソ連はアフガニスタンに侵攻したのか」という問いに対する分析方法について検討してみたい。

今日の国際関係論においては、対外政策という研究領域がある。この研究領域の主題は、国家あるいは個人、集団、組織からなる政策決定システムがなぜ、どのようにして行動をとるに至るのかを分析することである[4]。この研究領域での代表的研究にグレアム・アリソン（Graham Allison）の『決定の本質』があげられる[5]。アリソンは1962年のキューバ危機の分析において「なぜ、ソ連はミサイルをキューバに持ち込んだか？」という命題を設定し、三つのモデルを使い説明を試みた。この3モデルの要約は以下のとおりである。①合理的行為者モデル。国内政治過程は無視し、基本的に、対外行動は国際関係によって規定されるとする。国家は単一の行為主体として合理的な決定を下すという考え方を前提とする。この考えを応用してキューバミサイル危機の説明に当てはめた場合、ソ連の戦略的目的からしてキューバにミサイルを建設することがいかに合理的な行為であったかを示すことができれば、この事件への説明が完了したことになる。②組織過程モデル。政策とは組織的な標準作業手続きに基づいた機械的または準機械的プロセスの産物であるとし、対外政策の決定は、組織的な脈絡と圧力の中で行われるとする。これをキューバミサイル危機に当てはめる場合、政策決定にかかわったソ連の機構を判別し、キューバへのミサイル配備決定を生み出した組織の行動または組織間の関係を説明すれば、分析は完了したことになる。③政府内（官僚）政治モデル。対外政策は、政府内のプレーヤー間のさまざまな駆け引きゲームから派生する結果とする。そのため、当該の決定を生み出した人が誰で、その人に対して誰が何をしたのかを見出だしたときに分析を完了したことになる。

アリソンのモデルは以上の三つであるが、ジリ・バレンタ（Jiri Valenta）は、この「アリソン・モデル」を批判継承し、ソ連のチェコ侵攻を分析した。この際、バレンタは分析方法として主に官僚政治モデルを使用したが、アリソンの官僚政治モデルをそのまま踏襲していない。バレンタはとくに政策決定におけるソ連政治の特殊性を強調した。ソ連政治の特殊性として、政治局が政策決定に携わる組織間の紛争を最小化させる役割をはたしていること、および、ソ連の政治文化ともいえる集団指導制をあげる。また、ソ連の対外行動は、他の国家のような単一の行為主体（政府）が国家利益の最大化をはかることからおこるのではなく、複数のアクター（官僚政治機構の長や政治局員）の政治的駆け引きの結果からおこるとみる。そして、ソ連外交に影響を与える政策決定者は、決定の際に国家安全保障に対するイメージ・組織的利益・国内利益・個人的利益・個人的習慣に束縛されることを前提とした[6]。

アフガニスタン侵攻の政策決定要因と決定過程に対する分析方法を筆者はこの二つの著書からヒントを得た。モデルの構築にその主目的をおいていないという点と、ゆるい概念枠組みを設定している点では本論文はバレンタの研究手法に近いといえるが、分析方法はアリソンとバレンタの分析方法を合成したものとなっている。

本稿では、まず国際関係からソ連のアフガニスタン侵攻決定に関する分析が行われる。基本的に対外行動は国際関係によって規定されるとする前提に立ち、国内政治に関してはブラックボックスとする。ソ連は自国の利益を最大化するために合理的に行動するという前提をおき、ソ連のアフガニスタン侵攻の理由をそこから導き出す。ここではソ連のアフガニスタン侵攻における政策決定要因が分析される。ソ連国内政治に関してはブラックボックスとするため当時の客観的国際情勢がその分析の主な拠り所となる。ここでの分析

方法はアリソンの合理的行為者モデルに近いものとなっている。

次に、国内政治から、ソ連のアフガニスタン侵攻への分析が加えられる。国内政治レベルの分析は、組織レベルと個人レベルからの分析に分けられる。組織レベルの分析では、アフガニスタン政策の決定に携わったソ連政府の機関は何か、またその行動はどのようなものだったか、また、決定に携わった機関が複数の場合には機関と機関の関係が考察される。ここでは主に政策決定過程が分析されるが、資料としてソ連政治局議事録などの内部公式文書をつかうために政策決定要因にも接近可能となるであろう。また個人レベルの分析では、政策決定に影響を与えたのは誰であるかが検証され、決定に影響を与えたと思われる政策決定者の経歴や思考傾向などが分析される。また決定に携わった人間が複数の場合は、彼等の政治的駆け引きも分析の対象となる。ここでは主に回想録や個人の経歴が資料となる。ここでの分析は政策決定要因および組織レベルで判明しなかった政策決定過程の分析にも有効となるであろう。この組織レベル・個人レベルの分析ではバレンタの概念枠組みを応用した。

これら国際関係レベル・国内組織レベル・個人（政策決定者）レベルの三つのレベルでの重層的アプローチは、アフガニスタン侵攻の決定要因および決定過程の分析におけるその結論の正確さを高めることになろう。

第2節　国際関係レベルの分析

国際関係レベルでの分析では、前述したように、国家は自己の利益を最大化するために合理的に行動するという前提をおく。アフガニスタン侵攻の分析の場合、まずアフガニスタン侵攻によって得るソ連の利益が何なのかを特定し、その利益を追求するためにアフガニスタン侵攻がもっとも合理的選択であったことを説明できれば、「なぜ、ソ連はアフガニスタンに侵攻したか」について仮説を提起できよう。だが、アフガニスタン侵攻事件の場合、ソ連がアフガニスタン侵攻によって得る利益が複数想定できるため、複数の仮説が存在してきた。以下、それらを紹介し、もう一度それらの仮説の合理性を検証してみる。

仮説1　石油獲得による西側への攻勢説

この説をとる合理的説明者は、アフガニスタン侵攻は米国をはじめとする西側および中国への攻勢の布石とみなす。この見方の背後には、「膨脹主義のソ連」というイメージがある。この説の主な論拠は以下のようなものである。アフガニスタンを獲得することは、ペルシャ湾進出の布石である。ソ連がペルシャ湾に進出した場合、帝政以来の悲願である不凍港の確保さらに石油資源の獲得が容易となる。また、不凍港の確保によってシーレーンの寸断も可能となり、西側経済にも致命的打撃を加えることができる。さらに、アフガニスタンに中距離ミサイルを配備すればペルシャ湾全域を射程内におさめることができ、MIG 23戦闘機を使えばホルムズ海峡まで30分で到達可能となる[7]。以上の見解は、ソ連がアフガニスタンに侵攻した当初、西側諸国の支配的見方であった。例えば、カーター大統領は80年1月4日の演説で「ソ連の狙いはイランとパキスタンを脅かし、世界の原油供給の大半を支配するもの」と述べた[8]。また、中国の『人民日報』（80年1月11日付）は、ソ連の世界制覇のための軍事戦略は①米国をしのぐ軍事増強を計り、②核・通常戦争の準

備を強め、③奇襲作戦を展開して外国を侵略し、④目下のところ欧州、アジア大陸から南下してインド洋への進出をめざすものとした[9]。

しかし、一見合理的にみえるこの説明は、実は合理性を欠いている。なぜなら、ソ連が石油を思うがままにできる状況をつくりだすには、米国さらには中国との正面衝突まで覚悟する必要がある。仮に、ソ連が世界赤化の目的に固執していたとしても、米・中との衝突までも覚悟した青写真をもってアフガニスタン侵攻を敢行したとは考えにくいからである[10]。

仮説 2　イスラム革命のソ連国内波及懸念説

この説をとる合理的説明者は、アフガニスタンとソ連南部の近親性を問題にする。この説の詳細は以下のとおりである。

アフガニスタンはソ連と国境を接し、歴史的にもソ連とアフガニスタンは深い繋がりを有していた。とくにイスラム教を媒介としてソ連中央アジア諸国との繋がりは強い。ソ連のタジク・ウズベク・トルクメン共和国はアフガニスタンと隣接しており、また、アフガニスタン北部には、ロシア革命時に避難してきたタジク人・ウズベク人・トルクメン人が居住している。1979 年 2 月のイランでのイスラム革命は、イスラムの伝統が強いアフガニスタンにおいてもイスラム革命勃発の可能性を高めた。仮に、アフガニスタンでイスラム革命が起こった場合、ソ連中央アジア諸国にもイスラム革命の波が飛び火する危険性がある。ソ連のアフガニスタン侵攻はこのような懸念から生まれたとするのが、この仮説の見解である[11]。

しかし、中央アジアのムスリムたちが、ウズベク人・カザフ人などの民族感情を越えて連帯できるかという点、アフガニスタンよりもソ連中央アジア地域の住民たちの方がより高い文化的権利とより高い生活水準をたもっていた点を考慮すれば、ソ連がイスラム革命の自国への飛び火を脅威と認識していたかは疑問である。当時のソ連の説明と客観的状況を見る限り言えることは、ソ連のイスラム教徒居住地域の反体制運動に対する懸念やイスラム革命そのものに対する懸念は、ソ連の計算を左右する重要な要素にはなっていなかったようである。それよりも、ソ連は、アフガニスタン政府の崩壊に伴ってイスラム勢力と米国の反ソ戦線が自国の南部国境で形成されることを懸念した可能性が高い。

ソ連がイスラム革命そのものを脅威としたのか、それとも、イスラム革命と米国が結託し反ソ戦線が形成されるのを脅威としたのかは、はっきり区別して認識しておく必要がある。

仮説 3　反ソ戦線形成懸念説

この説をとる合理的説明者は、米国によるアフガニスタンの反ソ基地化に対する懸念が、ソ連のアフガニスタン侵攻の要因になったとみる。PDPA（アフガニスタン人民民主党）の政策は、典型的な左翼偏向政策と言えるもので、急激に広範囲な社会改革計画（土地改革、少数民族のための開発計画など）を押し進めた。しかし、この政策はあまりにも多くのことを速く成し遂げようとしたため、民衆の抵抗にあった。とくに、土地改革は、農民に土地を返さざるをえなくなった 4 万人の封建大地主の利益に反した。しかも、自分でその土

地を利用できるほど意識が育っていなかった農民たち自身が、地主側についた。また、PDPA は大部分の僧侶を反革命勢力として相手にせず、イスラム寺院を閉鎖したりした。そのため、イスラム聖職者との対立も激化した。また、イスラムゲリラはパキスタンの基地から国境を越え、アフガニスタンでゲリラ活動を行った。このことは、ソ連にイスラム勢力の背後に米国の存在があると確信させる理由ともなった。さらに PDPA の指導者タラキを排除して政権についたアミン（PDPA のナンバー２）は、ソ連への不信から米国との接近をはかろうとした。このような状況のもと、アフガニスタンでの反革命勢力の台頭とアミン政権の米国接近を阻止するためには、介入以外に方法はないとソ連は判断した。アミン政権が続いたとしても、またイスラム政権が成立したとしても、アフガニスタンが米国と反ソで結託するシナリオはさけられなかったとソ連は認識したとするのが、この仮説の主張するところである[12]。

この説は、ソ連が侵攻直後になぜアミンを射殺したのかという謎に解答を与えている。また、この仮説に対して、今のところ指摘できる矛盾点は見当たらない。

仮説 4　米国のデタント政策転換要因説

ソ連のアフガニスタン侵攻後、80 年 1 月、カーター大統領はソ連に対する制裁措置を発表した。上院への SALT II 審議の延期要請・米ソ間の新領事館開設・米ソ文化経済交流計画の延期・高度技術と戦略物資の対ソ売却停止・1700 万トンの対ソ穀物輸出停止・パキスタン援助推進・モスクワ五輪ボイコットなどである。また、米国は「カーター・ドクトリン」を打ち出し、78 年 2 月から検討されていた緊急展開部隊（RDF）の創設を発表した。さらにブラウン国防長官の国防報告では、むこう 5 年間の国防計画を大幅に拡大することが述べられた。

ソ連はアフガニスタン侵攻がもたらす米国のこのような態度の硬化を予測していなかったのだろうか。この疑問への解答ともなるのが、ソ連はアフガニスタン侵攻前にすでに米国のデタント政策破棄を認識しており、侵攻による米ソ関係の悪化もやむをえないという結論に到達していたとする説である[13]。これを示唆する発言を米国・カナダ研究所長であったゲオルギー・アルバトフ（Г. Арбатов）が行っているので引用する。

> アルバトフ：…アメリカ側の公式の言い分によると、現在の国際関係の悪化の原因はアフガニスタン事件にあるということになるが、この言い分は通らない。ソ連はアメリカの新政策を冷戦にむかう大きな後退と受けとめているが、この政策の根幹をなす主な決定がアフガニスタン事件よりはるか以前に下されたものであるという事実一つをとっても、アメリカ側の主張はつじつまが合わない。
>
> [質問]―：それはどういう決定をさしているのか？
>
> アルバトフ：今後 15 年間、軍事予算を毎年ふやしていこうという北大西洋条約機構（NATO）の決定（1978 年 5 月、ワシントン）、軍事計画拡大と史上最高の軍事支出を目指す「5 ヵ年計画」についてのアメリカ大統領の決定（1979 年 11 月）、さらにアメリカ製中距離ミサイルの生産とヨーロッパ配備についての NATO の危険極まりない決定（1979 年 12 月ブリュッセル）、またアメリカは、やはりアフガニスタン事件以前に、事実上、軍事削減交渉を

凍結した。第2次戦略兵器削減条約（SALT II）の批准は、1979年9～11月の段階で、すでに相当疑問視されていた。さらにまた、明らかに反ソ連の狙いをもって中国との急接近が実現した。1979年の秋には、アメリカは航空機、核兵器を載せた大量の艦船をペルシャ湾に送った。これが単にテヘランのアメリカ人人質を解放するためのものであり、アメリカの外交政策ないし軍事姿勢の全般的変化を示すものでないとは、われわれには信じがたかった。したがって、ソ連では1979年12月半ばにすでに、アメリカが急激な政策転換を行いつつあるとみていた。

[質問]一：ということは、アメリカの政策がアフガニスタンに対するソ連の行動に影響を与えたということか？

アルバトフ：それが重要な要因になった。

[質問]一：もし緊張緩和が正常に発展し、あなたがいま指摘したような困難が起きなければ、ソ連はアフガニスタンに軍隊を送らなかった、ということなのか？

アルバトフ：たぶん、送らなかっただろうと思う。…[14]。

仮説5　同盟国へのイデオロギー的影響懸念説

この説を強調する合理的説明者は、ソ連がアフガニスタンでの78年4月のクーデターを共産革命と承認してしまった事実を強調する。共産主義理論では、共産革命が成功した国家に再度革命がおこることはありえない。そのため、仮にアフガニスタンの共産政権が反革命で崩壊した場合、アフガニスタン自身に止まらず東欧をはじめとする他の同盟国にも、イデオロギー的動揺を与えることになる。また、ソ連の体面と権威も著しく傷つけられる。

米国の研究者アダム・ウラム（Adam Ulam）はこのように述べる。「1979年の軍事介入は、おそらく最も用心深い政治局員にとってみても現実の必要性をもったものだったろう。いったん共産主義革命を承認した以上、ソ連は政権が民衆の反乱によって機能麻痺したり、打倒されたりすることを容認できなかった。その代わり何人かのソ連指導者たちは、1978年の実験を承認したことがそもそも誤りであったと考えるのである」[15]

また、仏のソ連研究者エレーヌ・カレル＝ダンコース（Hélène Carrère d'Encausse）は、「…もしアフガン政権が倒壊するようなことがあれば、ソ連は自国との諸条約に書きこまれたすべての援助公約が何の役にも立たないことを立証したことになるだろう。これは中国にとっても大変な励ましになり、さらに懲罰作戦を進めて、カンボジア、あわよくばベトナムでも主導権を取り戻そうという気を起こさせるに違いない。アフガニスタンで賭けられているのは、単にタラキ、アミン、あるいはハルク派の運命だけではなかった。それはまたベトナムにおけるソ連の存在であり、1975年以来いくつかの大陸で達成された成果そのものだったのである。介入決定の核心は、まさにここにあった。すなわちアフガン革命の失敗とそれが自国内イスラム教徒に及ぼす破滅的な心理効果はもとより、時間的、空間的に離れたところにまでもたらしかねないもろもろの結果に関する認識である」[16]としている。

ソ連指導部が同盟国へのイデオロギー的影響を懸念したということは、確かに、説得力をもっている。この説が採用できるかどうかは本稿の以下の検証を待たねばならないが、説明には矛盾点はない。

以上、アフガニスタン侵攻に関する代表的な仮説に説明をほどこしてきたが、その中で矛盾点を指摘できず、合理性をもっていたとみられるのは、仮説3、仮説4、仮説5である。前述したように、合理的説明が可能な説が複数ある場合に、すべてがアフガニスタン侵攻の理由として採用できるのか、それとも、この中で幾つかが採用できるのか判断することは容易ではない。また、採用できる説が複数ある場合に、仮説間の相互関係（どれかが主要因でどれかが副次的要因など）まで検討する必要がある。しかし、ソ連の国内政治をブラックボックスとするこの分析方法ではこれ以上の接近は不可能である。ここで、国内政治の分析が不可欠となるのである。

第3節　国内政治レベルの分析

合理的説明が複数可能な場合、複数ある内のどの要因がもっとも妥当性をおびるものかを判断するには、ソ連の国内政治をブラックボックスとしていたのでは不可能である。この節では、前節においてブラックボックスとしていたソ連の国内政治に注目する。ここで用いられる分析の前提になるのは以下である。

ソ連の外交政策は、いくつかの国内アクター（官僚組織、政治局メンバーなど）による政治的駆け引きの産物であると見る。各組織および政策決定に影響をもつ個人は、自己の機関または自己の利益を最大化するよう行動する。そして、各組織および各個人の駆け引きは、ソ連政治制度の特殊性ともいえる政治局によって、その摩擦が最小化される。ここに、さらに、どの人物も政策決定を単独で決定する力を有しない「集団指導制」(17) の政治文化の影響が反映し、外交政策が決定される。

上記の概念枠組みに沿って、本節は二つの部分に分けられている。一つは「組織レベルの分析」、もう一つは「個人レベルの分析」である。

A．組織レベルの分析

ソ連政治システムの一つの特徴は、政治局の存在である。この政治局が外交政策決定の中心に位置し、外交政策を決定しているといえよう。また、とくにブレジネフ体制の集団指導制のもとでは、外交政策決定に携わる機関間で意見の相違がある場合は、政治局の調整により合議で意見の一致をはかってきた。さらに、アフガニスタンへの侵攻決定のような重大な問題の場合、組織の機械的プロセスのみの結果としてアフガニスタン侵攻が決定されたということはありえなく、各機関（外務省、KGB、軍、党国際部など）のアフガニスタン情勢における情報や提言が政治局に報告調整され、政治局で最終的決定が行われた可能性が高い。とくに、アフガニスタン侵攻当時には、外相、KGB長官、国防相が党政治局員であったということを考慮すると、外交政策決定における政治局の役割はかなり大きいものであったろうと推測できる。下部機関（外務省、KGB、軍、党国際部など）は、政治局に送った報告や提言によって間接的に影響力を発揮したとみられるが、その報告や提言内容はフォローする必要があろう。本節では、ソ連の外交政策に影響をもっていたとみられる各機関（外務省・KGB・軍・党国際部）が、アフガニスタンについてどのような情報や提言を報告し、その情報や提言を各機関の長がどのように扱ったか、また、各機関間の関係はどのようになっていたのか、さらに政治局がどのような調整機能を果たしたのか

を分析する。その際、これら決定過程のみならずアフガニスタン侵攻の決定理由（要因）にも留意する。

まず、外務省・KGB・軍・党国際部・政治局の動きを明らかにする公式資料があるので、最初にそれを翻訳紹介する[18]。（なお、下記資料の下線はすべて金成浩による）

［資料１］[19]

ソ連共産党中央委員会

極秘

特別文書

No. P 149/XIU

ブレジネフ、コスイギン、アンドロポフ、グロムイコ、スースロフ、ウスチノフ、ポノマリョフ、プサコフ、ワイヴァコフ、スカチコフ、ザミャーチン同志へ

1979年4月12日ソ連共産党中央委員会政治局会議　No. 149議事録に関する覚書き

アフガニスタン情勢に関する今後の我々の政策

グロムイコ、アンドロポフ、ウスチノフ、ポノマリョフ同志は、覚書きの中で設定された問題に関して検討することに同意している。（添付文書あり）

中央委員会書記

No. 149議事録　XIU項に関して

極秘

特別文書

共産党中央委員会

…ヘラートの事件はまた、民衆内でのPDPA［アフガニスタン人民民主党］の政治的・煽動的プロパガンダ活動の弱さを露呈した。新体制を不安定化させる敵の行動に、反動的聖職者が参加するようになり、その行動は党よりも活発で広範囲なものになっている。

ソ連はDRA［アフガニスタン民主共和国］の指導部に対して、高いレベルで何度も勧告と忠告を与えた。それらはアフガニスタン指導部の過ちと行き過ぎを指摘したものだった。しかし、アフガニスタン指導部は、政治的硬直性と未熟さを露呈させ、ほとんど忠告を聞かなかった。

ヘラート暴動によって、DRA指導部の政治的経験の不足が明らかになった。ソ連軍が介入することによって起こる深刻な政治的結果について、彼等が理解していないことはヘラートの事件で明らかである。反政府反対運動の内部的性質のため、アフガニスタン反革命の鎮圧に

ソ連軍を使用することは、ソ連の国際的権威をひどく傷付け、軍縮のプロセスを後退させることは明らかである。加えて、ソ連軍の使用は、タラキ政権の弱点を露呈させ、さらに高いレベルでの反政府攻撃を招き、国内においても国外においても反革命の範囲を拡大させることになるだろう。アフガニスタン政府が自国軍をもってヘラートの反乱を鎮圧することが、反革命を抑え新体制の相対的な強さを提示することになるだろう。それゆえ、アフガニスタンへソ連軍部隊を派遣してほしいとするDRA指導部の要請を差し控える我々の決定は、正しかった。政府への反乱の可能性が排除できないかぎり、この政策はさらに継続されるべきである。

もちろん、対反革命闘争と国内情勢の安定化において、アフガニスタン指導部への援助は継続すべきだ。我々は政府の影響力を強め、人民を社会主義革命の方向へ導くのを援助しなければならない。…

A. グロムイコ　Ю. アンドロポフ　Д. ウスチノフ　Б. ポノマリョフ

1979年4月1日　　No. 129/GS　No. 25-S-576

[資料2][20]

文　書

アフガニスタン軍の統一訓練センターをカブールに創設することを検討するのが妥当だろう。

1979年5月6日

A. プザノフ
Б. イワノフ
Л. ゴレロフ

[金成浩　注：プザノフはアフガニスタン駐在ソ連大使、イワノフはアフガニスタン駐在KGB将校で中将、ゴレロフはアフガニスタン駐在軍事顧問団長で中将]

[資料3][21]

(1979年6月29日付ソ連共産党中央委員会政治局第156会議議事録からの抜粋)

アフガニスタン民主共和国の状況と状況改善を可能とする方法について

1. 1979年6月28日付のソ連外務省・ソ連KGB・国防省・ソ連共産党国際部の文書で述べられた提案に同意。(文書添付)
2. アフガニスタン人民民主党政治局に対するソ連共産党中央委員会アピール文書とともに、カブール駐在ソ連大使館への指示計画を承認。(文書添付)
3. アピール文書の中で決定された問題に関して、アフガニスタン民主共和国指導部と話し合

うために、Б. Н. ポノマリョフ同志を派遣することが適当。

中央委員会書記　Л. ブレジネフ

ソ連共産党中央委員会第156会議議事録第4項に関して（添付文書）

アフガニスタン民主共和国の状況は紛糾している。反対派部族の活動はいっそう広範囲なものとなり組織的様相を呈している。聖職者は反政府、反ソ連的煽動を強め、イランのような「自由イスラム共和国」をアフガニスタン民主共和国内で創設する考えをその説教で述べている。アフガニスタン民主共和国の確立には、困難な客観的要素がたくさんある。経済的後進性、労働階級の少なさ、アフガニスタン人民民主党の虚弱性があげられる。この困難さはさらに主体的な原因によって増大している。：党と国家内に集団指導制が不在であり、すべての権力は法の違反を許されているH. M. タラキとX. アミンの手に集中している。国内に人民戦線が不在である。また、地方に革命政権が創設されていない。これらの問題について我々の顧問たちが提案を行ったが、アフガニスタン指導部は実行に移していない。以上のことと関連して、ソ連外務省・ソ連KGB・国防省・ソ連共産党国際部は以下の内容が適当であると認める。

1．アフガニスタン人民民主党政治局にソ連共産党中央委員会政治局名の文書を送る。この文書には、親しみのこもった形で、四月革命の成果を喪失する現実的危険性に関してのソ連指導部の不安と心配が述べられる。また、対反革命闘争の強化と人民の権利の強化に対する提言を盛り込む。

……

4．バグラム空港にあるソ連飛行中隊機の警備と防御のために、アフガニスタン側の同意を得て、飛行整備技術員の制服に変装したパラシュート降下部隊を派遣する。ソ連大使館の警備のために、大使館のサービススタッフとして、カブールにソ連KGB特殊部隊（125-150人）を派遣する。情勢悪化の場合の出動を目的として、特別重要政府施設の警備と防御のために、アフガニスタン民主共和国（バグラム空港）に参謀本部情報総局（GRU）特殊部隊を本年8月初めに派遣する。

……

検討することを求める。

A. グロムイコ　　Ю. アンドロポフ
Д. ウスチノフ　　Б. ポノマリョフ　　1979年6月28日

［資料4］[22]

文　書

以下が妥当と考えられる：……

7．アフガニスタン人ヘリコプター乗員の早急な養成のために、アフガニスタンのシンダンド

空軍基地に、ソ連ヘリコプター部隊を派遣する問題について検討すること。このヘリコプター部隊は、イラン国境沿いの偵察飛行をも可能にするだろう。

1979年7月12日

A. プザノフ
Б. イワノフ
Л. ゴレロフ

[資料5][23]

文　書

…アフガニスタン指導部は、真剣に反革命との新たな衝突に備えて準備をしているが、危機的状況の場合には、ソ連の直接的援助があることを当てにしている。

1979年7月12日

A. プザノフ
Б. イワノフ
Л. ゴレロフ

[資料6][24]

文　書

タラキおよびアミンは、国内におけるソ連の軍事的プレゼンス拡大の問題に再三言及した。危機的状況の場合に備えて、「アフガニスタン政府の正式要請に基づく」ソ連軍約2個師団の派遣問題が取り上げられた。アフガニスタン指導部のこの申請に対して、これはできないということを述べた。

1979年7月19日

Б. ポノマリョフ

(金成浩　注：ポノマリョフは党国際部部長兼政治局員候補)

[資料7][25]

文　書

7月19日、タラキと2度目の会合をもった。

…再びタラキはソ連の軍事援助強化問題を取り上げた。タラキは、異常事態の発生の場合にはカブールへのパラシュート部隊の上陸が、反革命運動勢力の壊滅に決定的役割を果たすだろうと述べた。

ソ連はこのような介入はできないと再びはっきりと返答した。

1979年7月20日

Б. ポノマリョフ

[資料 8][26]

文　　書

…8 月 10 日、11 日の会談において、アミンは「ソ連軍特殊部隊 3 個師団の首都への配備要請にソ連指導部が肯定的決定を与えてくれれば、敵警戒のための軍をカブールに駐留させることが可能となる」と述べた。

8 月 12 日保安部長官サルバリは、アミンの命令として、ソ連軍特殊部隊および輸送用ヘリコプター(ソ連人乗員とともに)派遣についてのアフガニスタン指導部の請願を早急に実施して欲しいと述べた。

1979 年 8 月 12 日

A. プザノフ
Б. イワノフ
Л. ゴレロフ

[資料 9][27]

文　　書

8 月 25 日、軍事顧問団長とともに、アミンと会談をもった。アミンは再びカブールへのソ連軍介入を問題提起した。これにより、敵との戦闘用に配備しているカブール守備隊 2 個師団の内 1 個師団をうかすことができるとアミンは述べた。

アミンには、ソ連軍の介入はこの地域での軍事的・政治的混乱を招き、米国による敵への援助強化を招くと返答した。

1979 年 8 月 25 日　　И. パブロフスキー

(決議)　ソ連共産党中央委員会に報告。　　Д. Ф. ウスチノフ

(金成浩　注：パブロフスキー将軍は、アフガニスタン情勢調査のためモスクワから派遣された。ウスチノフは国防相兼政治局員)

[資料 10][28]

文　　書

カブール駐在ソ連代表たちへ

1. アフガニスタンでの現実の状況を考慮すると、アミンおよび彼の側近との関係を拒否しないことが妥当であると認められる。これと共に、反革命ではないタラキ支持者および個人的に嫌いな人物をアミンが弾圧するのを止めさせる必要がある。また、同時に、アミンが今後どのような政治的特質や傾向をもっているかを明確にするために、アミンとの接触は必要

である。

2．アフガニスタン戦争に参加しているわれわれの軍事顧問たちおよび安全・内務関係機関のソ連人たちは、各自の任務にとどまることが適当である。彼等は敵勢力および他の反革命勢力に対する戦闘行動の準備と遂行に関連した各自の直接的任務を果たさなければならない。もちろん、我々の軍事顧問たちは、その駐在部隊が、アミンの嫌いな勢力の弾圧活動に引き込まれる場合、加担する必要はない。

1979年9月15日　　A. グロムイコ

（金成浩　注：グロムイコは外相兼政治局員。なお、この電文はタラキがアミンによって排除されたことを受けてのものである）

[資料11][29]

共産党中央委員会

タラキが政権から解任され、続いて物理的に排除された本年9月13日から16日の出来事以後のアフガニスタンは、極端に複雑な状況になっている。アミンは、政権強化の意図をもって、憲法制定計画の開始や逮捕者の一部即時釈放という模範的態度をとっている。しかし、実際は党・軍・国家機関・社会組織内での弾圧を拡大させている。アミンは活動的または潜在的敵と見られる者を党および国家内でのあらゆる政治活動から排除している。……最近、アフガニスタン新指導部に、西側諸国との関係を構築する「よりバランスのとれた政策」を行おうとする徴候が現れた。特に明らかなのは、アフガニスタン側との独自接触によって、米国指導部は、アフガニスタンの政治的方向をワシントンの方針に沿うよう軌道修正させることが可能であるという結論に達していることである。ソ連との関係では、アミンの行動はますます偽善と裏表を見せはじめている。

A. グロムイコ　　Ю. アンドロポフ
Д. ウスチノフ　　Б. ポノマリョフ

1979年10月29日

[資料12][30]

文　書

1979年12月2日、アミンは軍事顧問団長を招待し、以下の事を述べた。「バダフシャンの敵に対して中国とパキスタンから活発な援助が与えられている。アフガニスタン側は他の戦闘地域から軍を振り向けることはできない。状況の正常化のために、この地域へ強力な軍1個師団の短期派遣をソ連政府に要請する」。

会見の終りに、アミン同志はこの話しをソ連国防相に伝えてくれるよう要請し、Л. И. ブレジネフにこの問題を個人的に相談する準備があると述べた。

1979年12月2日　　C. マゴメトフ

(金成浩　注：C. マゴメトフ大将は、1979年11月半ばからゴレロフ将軍のかわりに、アフガニスタン駐在軍事顧問団長に就任)

[資料13][31]

文　書

12月3日、アミンとの会合をもった。アミンは会談でこう述べた。「われわれは、人民警察の編成のために第18および第20師団の兵士と軍備の一部を（マザリシャリフとバグランから)移管するつもりだ。この場合、ソ連正規軍のアフガニスタン介入に代わり、アフガニスタン北部地方での秩序回復と安全の保障のために、我々の人民警察と共同活動するソ連警察部隊を派遣してほしい」。

1979年12月4日　　C. マゴメトフ

[資料14][32]

(1979年12月6日付ソ連共産党政治局会議議事録No. 176からの抜粋)

アフガニスタンへの特殊部隊派遣について

1979年12月4日にソ連KGBと軍の文書において述べられたこの問題に関する提案に同意する。(添付文書あり)

共産党中央委員会書記

議事録No. 176第82項に関して（添付文書）

共産党中央委員会

革命ソビエト議長・アフガニスタン人民民主党中央委員会書記長・アフガニスタン民主共和国首相のアミンは、彼の官邸警備用に自動走砲部隊のカブール派遣を何度も要請している。複雑な状況とアミンの要請を考慮すれば、この目的のために準備されていた参謀本部情報総局(GRU)特殊部隊総数約500人を、ソ連軍所属であるとは明らかにならないような制服を着用させて、アフガニスタンに派遣するのが適当であるとみられる。アフガニスタン民主共和国へのこの部隊の派遣可能性は、1979年6月29日共産党中央委員会政治局決定No. 156第4項によって予見されていたものである。カブールへの部隊派遣問題がアフガニスタン側と合意されたならば、この部隊を軍事輸送部隊機で輸送することを検討している。本年12月の最初

の報告の中で、Д. Ф. ウスチノフ同志はこれに同意している。

Ю. アンドロポフ
H. オガルコフ　　1979年12月4日

[資料15][33]

極秘
特別文書
議長：Л. И. ブレジネフ同志
出席者：スースロフ M. A.、グリシン B. B.、キリレンコ A. П.、ペリシェ A. Я.、ウスチノフ Д. Ф.、チェルネンコ K. У.、アンドロポフ Ю. B.、グロムイコ A. A.、チーホノフ H. A.、ポノマリョフ B. H.

ソ連共産党中央委員会決定

「A」における状況に関して
（金成浩　注：「A」とはアフガニスタンを指す）

1．アンドロポフ Ю. B.、ウスチノフ Д. Ф.、グロムイコ A. A. によって述べられた評価と方策を承認する。これらの方策の執行過程において若干の修正を採用する権限を彼等に与える。
　中央委員会決定が必要な問題は政治局に即時に提議されなければならない。
　すべてのこれらの方策の執行は、同志アンドロポフ Ю. B.、ウスチノフ Д. Ф.、グロムイコ A. A.に委ねられる。
2．同志アンドロポフ Ю. B.、ウスチノフ Д. Ф.、グロムイコ A. A. に委ねられた方策の執行状況を中央委員会政治局に報告するよう求める。

中央委員会書記　Л. ブレジネフ

N[o] .997-[op] (1 p[age])　P[rotocol] 176/125
1979年12月12日

以上の資料から確認されることをまとめると、
① ヘラート暴動（79年3月）後、ソ連政治局でアフガニスタン情勢の分析が行われた。軍事介入は、ソ連の国際的権威の失墜と軍縮プロセスの後退を招き、アフガニスタン反政府活動の激化を招くと報告された。
② タラキは、79年春からソ連に再三にわたり軍事介入の要請を行った。
③ アフガニスタン情勢の悪化とともに、アフガニスタン駐在各機関代表であるプザノフ

大使(А. Пузанов)、イワノフ KGB 将校(Б. Иванов)、ゴレロフ軍事顧問団長(Л. Горелов)は、アフガニスタンへの軍事援助強化（ヘリの派遣、軍事教練センターの創設など）についての提案を本国に行った。

④　79 年 6 月、グロムイコ (А. Громыко)、アンドロポフ (Ю. Андропов)、ウスチノフ (Д. Устинов)、ポノマリョフ（Б. Пономарев）は、アフガニスタン指導部に国内情勢安定のための提言をもりこんだ文書の送付を政治局に提言した。また、ソ連軍部隊と KGB 特殊部隊をバグラム空港とソ連大使館に防衛目的に限定して派遣すること、政府重要施設防衛のために GRU 特殊部隊を派遣することを提言した。これをブレジネフが承認した。またブレジネフは、ポノマリョフをアフガニスタンに派遣することを決定した。

⑤　ソ連指導部は 79 年 7 月に党国際部部長・政治局員候補のポノマリョフをアフガニスタンに派遣し、アフガニスタン指導部にソ連正規軍の軍事介入はありえないことを伝達した。

⑥　79 年 8 月にモスクワから派遣されたパブロフスキー将軍 (И. Павловский) は、アフガニスタン指導部と会談し、「わが軍の介入は地域での軍事的・政治的混乱を招き、米国による敵への援助強化を招く」という理由をあげ、アフガニスタンへの軍事介入を拒否した。

⑦　79 年 9 月にアミンによるタラキ排除後、グロムイコは直接アフガニスタン駐在の各機関のソ連代表に指示を出し、アミンとの接触をつづけ彼の政治的動向を観察するよう命令した。また、アミンが私的に行う政敵排除には加担しないことを軍事顧問たちに命令した。

⑧　アミン政権になって、アフガニスタンは首都カブールの防衛も危うい状態が続き、国内状況も不安定を極めた。アミンはソ連に再三にわたり軍事介入を要請した。また、グロムイコ、アンドロポフ、ウスチノフ、ポノマリョフは、アミンの弾圧活動と米国への傾斜を懸念した報告を政治局に行った。

⑨　アンドロポフとウスチノフおよび参謀総長オガルコフは、12 月 4 日、GRU 特殊部隊をアミン官邸警備に限定して派遣することを提案。12 月 6 日、中央委員会で決定された。（これは、まだ官邸警備に限定した部隊派遣の決定である）。

⑩　12 月 12 日、アフガニスタン問題への対応方法が決定。今後、アフガニスタン問題はアンドロポフ・ウスチノフ・グロムイコの 3 人によって統括されることが中央委員会で決定された。

以上で、ソ連のアフガニスタン侵攻決定に影響を与えた機関が、外務省・KGB・軍・党国際部および政治局であったことが理解できた。次に、上記公式資料およびその他の資料（回想録など）をあわせて、これら各機関の動きと関連を検討してみる。

(1)　外務省

資料 2・4・5・8 における署名が、プザノフ大使・イワノフ KGB 将校・ゴレロフ軍事顧問団長の連名になっていることとその順序には注目する必要があると思われる。外務省・KGB・軍の各代表の名前が連名になっていることは、三つの機関が連携してアフガニ

スタンで外交活動を行っていたことを示している。また、当時の外務第一次官コルニエンコ（Г. Корниенко）と参謀総長第一代理アフロメーエフ（С. Ахромеев）によれば、1976年ごろからブレジネフの健康の悪化のため政治局の職務は分担され、アンドロポフ・グロムイコ・ウスチノフは外交・国防・法秩序、コスイギン（А. Косыгин）・マズロフ（К. Мазулов）は経済、スースロフ（М. Суслов）・ポノマリョフ・ジミャーニン（М. Зимянин）は党とイデオロギーを分割して担当していた[34]。［ブレジネフの健康状態の詳細に関しては本稿「B．個人レベルの分析」参照］。この証言は、外交を外務省・KGB・軍の3機関で担当していたことのさらなる証明とも言える。また、電文の中に党国際部アフガニスタン代表の名がないことは、党国際部が上記3機関とは別にアフガニスタンで外交活動を展開していたことを示唆している。さらに、電文の署名欄で、プザノフ大使の名が最初に出てくることは、アフガニスタンでの外交活動において、外務省が3機関（外務省・KGB・軍）の中でも統括的な立場に立っていたことをものがたっている。このことは、資料10を見ると、さらに明白になる。資料10では、グロムイコ外相がアフガニスタン駐在各機関のソ連代表たちあてに電文を記しており、その第2項目では軍事顧問にまで指示をだしている。本来なら、軍事顧問への指示は参謀本部あるいは国防相のはずだが、グロムイコが軍まで指示をだしていることは、外交問題におけるグロムイコの位置を示唆している。

(2) KGB

KGBのカブール駐在官事務所（侵攻後にはカブール以外の主要8都市にも駐在官事務所がもうけられた。その総数は、KGB将校約300名、さらに100人の支援スタッフがいたとされる）は、アミンによるタラキ暗殺後のアフガニスタン情勢について、イスラム指導者からのアミンへの厳しい反対、アフガン軍部からの反乱の脅威、差し迫った経済の崩壊をモスクワ本部に報告していた。アフガニスタン情勢のさらなる悪化とともに、アミンを排除しない限り共産主義体制は反ソ的なイスラム共和国にかわってしまうだろうとモスクワ本部へ報告していた[35]。

では、KGB長官アンドロポフの姿勢はどうだったのだろうか。1979年8月のKGBと軍の情報長官会議に出席した元KGB少将カルーギン（О. Калугин）は、この会議でイラン及びアフガニスタン情勢が討議されたと述べている。ここにおいて、KGB情報部長クリュチコフ（Крючков）は、「アンドロポフは軍の介入に反対している」として軍事介入に反対したが、一方、軍情報部長イヴァシュチン（Ивашутин）はアフガニスタンへの軍事介入を主張したと証言している。また、アンドロポフが最後に介入賛成にまわったのは、ブレジネフと友人ウスチノフに「ノー」と言えなかったからとも証言している[36]。一方、『アガニョーク』誌はアンドロポフの側近の話しとして、「当初、KGB前長官［アンドロポフ］は軍介入の考えを支持しなかったが、その後、彼が大使を務め軍を投入したハンガリーでの経験が反映し、軍介入の考えに変わった」と記した[37]。また、当時の「クレムリン・ドクター」だったチャゾフ（Е. Чазов）[38]は介入決定前のアンドロポフの態度をこう語っている。「当時、私はアンドロポフとしばしば会った。知り合ってから17年間で、アンドロポフがこんなに緊張状態にあるのを見たことがなかった。アフガニスタン軍事介入前には、アンドロポフは、ウスチノフとは違って、優柔不断で当惑していたと思う。」[39]

以上、複数の回想のつきあわせから言えることは、アンドロポフは当初ソ連軍の介入に反対だったが、しだいに、その姿勢を変化させ軍事介入に意見を変えたということである。しかし、なぜ、軍事介入に姿勢を変えたかについては、上述のように、ブレジネフや友人ウスチノフに「ノー」と言えなかったとする説（カルーギン元KGB少将）、ハンガリー動乱との類似性が反映したとする説（『アガニョーク』誌）があるが、現在のところ断定するのは難しい。

(3)　軍

軍内での動きを示す資料を紹介する。

当時の党国際部次長のチェルニャーエフ（A. Черняев）は、コルニエンコ（79年当時外務第一次官）から聞いた話しと前置き、以下のように回想している。「……［介入への］断固とした反対は、「意見を準備する」ことを指示された軍人たちから出てきた。オガルコフ、アフロメーエフ、ワレンニコフは上申書を提出し、そういうことはまず何よりも、政治的見地から不可能であり、考えられないことであると証明しようとした。しかし、ウスチノフは彼らを呼び出し、「気をつけ」の姿勢をとらせ、いつからわが国では軍人が政策の決定に乗り出しているのか、と叱責し、「つべこべ言わず」に「詳細な作戦計画」を至急提出しろ、と命令した。」(40)ただ、チェルニャーエフはこの話がどの時点のものであったかまでは述べていない。

また、パブロフスキー将軍は、79年8月にアフガニスタンを訪問し「わが軍の介入は地域での軍事的・政治的混乱を招き、米国による敵への援助強化を招く」という理由をあげて、アフガニスタン指導部に介入できない旨を伝達した（資料9）。さらに、パブロフスキーは、79年11月にモスクワへ帰還した時の模様を以下のように回想している。「1979年11月に、私はモスクワにもどった。ウスチノフ元帥が個人的に自分の帰国を引き延ばしていたので、なかなか戻れなかった。そして、それがなぜか理解した……。到着の日にウスチノフ元帥に報告するためにすぐに国防省に向かった。彼は私を冷たく迎え、ついでに私がアフガニスタン人民民主党内の「ハルク」と「パルチャム」の内部闘争について知っていたかどうか少し興味をもって尋ねた。アフガニスタン国内の情勢についての報告を終えて、私はアフガニスタンへわが軍の派遣の必要性はないことを話した。自分の意見を裏付ける多くの理由を上げた。とりわけ、政治局のだれかが述べているアミンへの多くの不信をモスクワが採用するよう提案し、アミンがアフガニスタンの軍事顧問団長を通してブレジネフへ宛てた個人的親書について話した。しかし、大臣は私の話しを聞こうとしなかった。」(41)

さらに、当時の参謀本部総作戦部長（総局長）ワレンニコフ（B. Варенников）は、参謀総長オガルコフ、参謀総長第一代理アフロメーエフとともに、アフガニスタン問題に関してソ連国防相に特別に報告を行ったと証言している。この時の参謀本部の意見はアフガニスタンでの状況を安定化させるために7万5千人の軍の介入は適当ではないということであり、その理由は力によってこの問題を解決するのは難しく、ソ連軍の存在は遠からずアフガニスタンでの敵の運動の強化をもたらすというものだったとしている(42)。また、『アガニョーク』誌のインタビューで、ワレンニコフは「参謀本部が、アフガニスタン介入が正

式決定されるまで、わが軍の介入に対しては反対を表明していた。参謀本部はソ連人の擁護には守備隊は動くが、戦闘行動には参加しないという案を提案していた。……当時の参謀本部が提案した方向は、原則的に正しかった。この路線を擁護することでどんな結果が個人に降りかかったとしても、我々は最後までこれを主張すべきだった。」[43] と述べている。さらに、コルニエンコはこの時の参謀本部の動きを、「介入反対理由は、ヨーロッパおよび中国国境に配備されたソ連軍の主力を削減することなしにアフガニスタン問題を解決することは非現実的であるというものであった。また、米国のベトナム侵攻の例も反対意見を裏付けるものとして述べられたが、彼等の意見はウスチノフによって無視された。」としている[44]。

以上の回想のつき合わせから導かれる結論として、国防相ウスチノフと参謀本部のオガルコフ・アフロメーエフ・ワレンニコフの間において意見の相違があったことは確実である。ただ、参謀本部の意見書がどの時点で提出されたか不明なため、ウスチノフが介入の方向に傾いたのがいつかははっきりわからないが、介入反対であったパブロフスキーがアフガニスタンからモスクワへ呼び戻された11月には、すでにウスチノフの姿勢は介入の方向に傾いていたと推察される。だが、なぜウスチノフが介入賛成の姿勢に転換したか、またなぜ、彼が参謀本部の提言を無視してまで強力に介入を主張したかは不明である。(これについての仮説は次の「B．個人レベルの分析」で提示されている)

(4) 党国際部

1978年のアフガニスタン人民民主党による四月革命によって、アフガニスタンは共産主義国家の正式な一員となった。この時、スースロフとポノマリョフは、78年4月のアフガニスタン人民民主党によるクーデターを「革命」と認定するのに積極的であった。これは、アフガニスタンは近い将来社会主義国になる国で、封建主義国家から社会主義国家へと飛び越える「第二のモンゴル」であると見たためであった[45]。

四月革命の正式承認後、78年5月半ばには党国際部アフガニスタン課長シモネンコ (H. Симоненко)が、党顧問団を率いてカブールを訪問した。党国際部のアフガニスタンにおける活動の中心は、アフガニスタン人民民主党(PDPA)の動向を調査することと、パルチャム派とハルク派の調停を行うことであった[46]。(だが、この調停は成功せず、78年7月にはハルク派がパルチャム派を排除した。)このような国際部の動きからみて、78年の四月革命以降、党国際部のアフガニスタンにおける活動が活性化したことはうかがえる。それは、79年7月には党国際部長ポノマリョフが直接アフガニスタンを訪問してタラキおよびアミンと会見し、ソ連軍介入について否定的返答をアフガニスタン側に伝達したことからも推測できる（資料6・7)。

問題は79年9月のアミンによるタラキ排除後に党国際部がどのような動きをしたかであるが、85年にイギリスへ亡命したKGB元大佐ゴルジエフスキーは、軍事介入の要請を最初にしたのは党国際部であり、その理由は、国境を接する国における社会主義体制の転覆をソ連はゆるすことはできないということであったと証言している[47]。なお、ゴルジエフスキーは、どの時点で党国際部が軍事介入の要請を行ったかまでは語っていない。また、「軍事介入の要請を最初にしたのは党国際部」という部分に関しては、コルニエンコの証言

とくい違っているため信憑性に疑問が残るが、イデオロギーの「番犬」的役割を帯びる党国際部の性格を勘案すれば、アフガニスタン革命政権が崩壊した場合におけるイデオロギー面での影響を党国際部が懸念したことは推測できよう。

なお、コルニエンコは、党国際部の専門家たちは侵攻に反対する意見を上層部に進言したが、成功しなかったとしている(48)。

(5)　党中央委員会政治局「アフガニスタン委員会」

上記資料の1・3・11において、グロムイコ、アンドロポフ、ウスチノフ、ポノマリョフが政治局に報告書を提出しているが、問題はこの4人の討議が党内のどういう場で行われたかである。資料にあるだけでも、3回4人の名前が連名で出てきていることを考慮すれば、4人の会議は定例化されていたようである。コルニエンコは政治局内に「アフガニスタン委員会」がもうけられていたと述べており、その参加者はグロムイコ、アンドロポフ、ウスチノフで時々ポノマリョフが加わっていたとしている(49)。おそらく、この報告書(資料1・3・11)は、政治局「アフガニスタン委員会」(50)で討議されたものであるとみられる。この「アフガニスタン委員会」で、アフガニスタンの情報交換と情勢分析が行われ、そこで討議された内容が政治局会議にかけられていたようである。

「アフガニスタン委員会」については、上記の公式資料以外に幾つかの資料がある。アフガニスタン駐在軍事顧問団長ゴレロフは、政治局「アフガニスタン委員会」で報告するため、1979年8月半ばにアフガニスタン駐在将校イワノフとともにモスクワに召還された時の模様をこう語っている。「政治局員のグロムイコ、アンドロポフ、ウスチノフ、そして参謀総長オガルコフおよび外務第一次官コルニエンコが出席していた。[アフガニスタン]国内と軍の状況についての私の簡潔率直な報告の後、質問が矢継ぎ早に飛んだ。基本的にそれらはグロムイコとアンドロポフからのものだった。その時は、わが軍の介入については直接的な議題とはならなかった。」(51)また、この会議の参加者にポノマリョフの名があがっていないが、これはポノマリョフの会議への参加が時々であったとするコルニエンコの証言とも矛盾しない。これらの回想録から推察されることは、「アフガニスタン委員会」は事務レベル機構をもたない政治局内の会合を指し、その成員は、グロムイコ、アンドロポフ、ウスチノフ、そこに、時々、ポノマリョフおよび関係機関のナンバー2（参謀総長オガルコフ、外務第一次官コルニエンコなど）が参加し、対アフガニスタン政策が討議されていたとみられる。

また、「アフガニスタン委員会」が形成された時期はいつだったのだろうか。『ナーシ・サヴレメンニク』誌に寄稿された論文によれば、アフガニスタン問題を討議する会合はすでにダウドが政権についた73年あたりからもたれていたが、まだ公式的な集まりとはなっていなかったようである(52)。さらに、コルニエンコは、ヘラート暴動が起こった79年3月の段階でもまだ公式化されていなかったとしているので(53)、公式的な会合となったのはこの後ではないかとみられる。

次に、政治局の動きを示す回想録などの資料を紹介する。当時の党国際部次長チェルニャーエフは、コルニエンコから聞いた話しと前置きして以下のように述べている。「干渉の発起人は、……グロムイコで、ウスチノフが彼を熱狂的に支持した。この「アイデア」

をブレジネフに上申する「プロジェクト」は4人で相談された。前述の2人プラス、アンドロポフとポノマリョフである。アンドロポフは反対しなかったものの、慎重で、「面倒になる可能性」について語った。ポノマリョフもやはり疑念を述べたが、やがて急いで「合流」した。」(54) だが、この証言の「干渉の発起人は、……グロムイコで、……」という部分に関しては、当のコルニエンコは違う証言をしているため、信頼性に疑問が残る。コルニエンコの回想録によると、一連の政治局内の動きは以下のようになっている(55)。

① イランも関与したと思われる1979年3月ヘラートの暴動と関連して、3月18日にタラキはコスイギンとソ連軍派遣問題について電話で会談した。この時、コスイギンは「これは複雑な政治的・国際的問題である」ことを強調した。

② この電話会談の後、「アフガンスカヤ・トロイカ」のアンドロポフ、グロムイコ、ウスチノフが集まった。この時はまだ公式的に政治局「アフガニスタン委員会」は無かったが、すでにこの3人は、時々ポノマリョフを加えてアフガニスタン問題を検討していた。全員の意見は一致しており、アフガニスタンへのソ連軍派遣は不可能であり、派遣すればアフガニスタン情勢は複雑になり、ソ連にとって深刻な国際的状況をまねくだろうというものであった。

③ 79年3月20日、タラキがモスクワを秘密訪問した。コスイギンが代表してタラキと会談した。そして、コスイギンは以下のように述べてソ連軍の派遣を拒否した。「軍の派遣の問題は我々によってすべての側面から検討された。我々は入念にすべての点を研究し、結論に到達した。もしわが軍が介入するならば、あなたの国の状況は良くなるどころか、逆に混迷を極めるだろう。」また、ブレジネフとの会見が予定されていたが、ブレジネフの健康状態から会見は遅れた。タラキとの会見では、ブレジネフは完全に準備された原稿にもとづいて、介入は行えないと述べた。

④ その後も、アミンとタラキのソ連軍介入の要請に対しては否定的返答が返された。79年夏に、カブールとその近郊のバグラム軍事空港に若干のソ連軍事部隊が派遣されたが、これはソ連人の安全確保と疎開を目的としたものであって、アフガニスタン政府への反政府活動を鎮圧するために派遣したわけではない。

⑤ 1979年9月のアミンによるタラキ排除は、モスクワを心配させた。アミン政権の動向を探るために、グロムイコはプザノフ大使およびソ連のその他の機関の代表に、アミンを国家指導者として扱い、関係を保つよう指示を出した。(資料10と一致)

⑥ 1979年3月から10月まで、グロムイコとコルニエンコの間では、アフガニタンへの軍の派遣は行わないことで意見が一致していた。介入の方向で意見交換が行われたことは一度もなかった。10月までは、アンドロポフにもウスチノフにも、不介入の路線を変更した徴候は認められなかった。しかし、タラキがアミンによって殺害された後、10月のどこかの時点で、グロムイコはコルニエンコとアフガニスタン介入について意見交換を止めた。介入後に［コルニエンコが］グロムイコとの会話からわかったことは、介入を支持して最初に発案したのはグロムイコではなく、アンドロポフとウスチノフがグロムイコを説得したらしい。アンドロポフとウスチノフの内、誰が最初に意見を変え介入支持を述べたかは推測するしかない。おそらく、KGB議長のアンドロポフは、アメリカのスパイを演じるようになったアミンが政権にとどまることの危険性とアフガニスタン情

勢をソ連が変えうる可能性を過大評価した。また、軍では当時のオガルコフ参謀総長兼国防第一次官、アフロメーエフ参謀総長第一代理、ワレンニコフ参謀本部総作戦部長（総局長）は、政治的見地からではなく、軍事的見地から反対意見を述べた。また国際部の専門家たちも、アフガニスタン介入の決定は間違いであるという考えを指導部（具体的にだれかは不明）に伝えようとしたが、成功しなかった。

⑦　12月10日、ウスチノフ国防相は参謀本部にパラシュート部隊・軍事空輸部隊5師団・トゥルケスタン軍事管区の自動走砲部隊2師団の出動準備を始めるように指示した。

⑧　アフガニスタン侵攻の最終的な政治決定は、12月12日午後に行われた（資料15と一致）[56]。その時のメンバーは、ブレジネフ、スースロフ、アンドロポフ、ウスチノフ、グロムイコで、別の資料に名が上げられているコスイギンは、私［コルニエンコ］のデータによると、当日は病気で欠席であった。のちになって、政治局全員の署名がある決議が作られた。

⑨　12月24日、国防省の高官を招集してアフガニスタン介入決定の採択が説明されたが、介入の目的についての説明はなかった。同日、国防相名の最初の文書「南部方面ソ連軍一部分のアフガニスタン民主共和国への介入について、友好関係にあるアフガニスタン民衆への国際的援助供与と隣接国からの予想される反アフガニスタン活動阻止への条件づくりのために」が公表された。

以上が政治局内の動きに関する回想である。ここでさらに考察を加えたいのは、最終的な介入決定を下したのは誰かという問題である。コルニエンコは、上記のように、ブレジネフ、グロムイコ、アンドロポフ、ウスチノフ、スースロフをあげている。一方、1989年12月24日ソ連邦第2回人民代議員大会に報告されたソ連最高会議国際問題委の「1979年12月のアフガニスタン軍事介入決定に関する政治評価について」では、出兵決定を下したのはブレジネフ、グロムイコ、アンドロポフ、ウスチノフであるとしている[57]。両者の違いはスースロフが入るかどうかであるが、コルニエンコの回想が93年に書かれたものでソ連最高会議国際問題委よりも4年あとのものであること、及びグロムイコもその新回想録において介入決定におけるスースロフの存在を指摘していること（これについては、「B．個人レベルの分析(5)スースロフ」の項を参照）から、スースロフの名は含めるのが妥当であるとみられる。

以上をまとめると、

①　政治局アフガニスタン委員会（構成員はグロムイコ、アンドロポフ、ウスチノフ、ポノマリョフ、および関係機関の次官クラス）において、アフガニスタン情勢の分析が行われた。そこでの提言が政治局会議の承認を経て、対アフガニスタン政策とされた。

②　軍事介入の最終決定が行われた12月12日の政治局会議には、一部の政治局員のみが参加した。参加メンバーは、ブレジネフ・グロムイコ・アンドロポフ・ウスチノフ・スースロフとみられる。スースロフはソ連第2回人民代議員大会では名指しされなかったが、コルニエンコとグロムイコの回想からみて最終決定の会議に同席していた可能性が高い。

なお、最終決定が行われた12月12日の政治局会議議事録（速記録）はまだ発見され

ていない。この会議が秘密会議であったため、速記録はとられていないとみられる。

B．個人レベルの分析

ここでは、決定に携わった個人に焦点を当てる。このアプローチでは、対外政策は政策決定過程に携わる個々人のプレーヤー間の駆け引きを含む相互作用の産物と見る。この場合はポイントが三つある。第一のポイントは誰が政策決定過程に関与したか。第二は決定に携わった者が、直面する問題についてどのような利害関係をもっており、また、それにどれだけコミットしているか。第三は政策決定者たちのもろもろの利害関係が相互作用の過程でいかに調整され、政策というアウトプットとしてでてくるかである。これをアフガニスタン介入に当てはめれば、以下の3点の分析が必要となる。(a)政治局内で介入決定に誰が関与したか。(b)そのメンバーがアフガニスタン介入に関してどのような利害関係をもっており、どのような利益を代表しているか。さらに個人のパーソナリティーと経歴からくる性向はどのようなものか。(c)政治局内での権力関係はどのようになっていたか。

(a) 介入の最終決定にだれが関与したか。

組織レベルでの分析で述べたように、ブレジネフ、グロムイコ、アンドロポフ、ウスチノフ、スースロフの5人とみられる。

(b) 介入決定したメンバーがアフガニスタン介入に関してどのような利害関係をもっており、どのような利益を代表しているか。さらに個人のパーソナリテイーと経歴からくる性向はどのようなものか。

(1) ブレジネフ

ブレジネフの分析において特に注目すべき点は、その健康状態である。ブレジネフが、政治局でのリーダーシップをどれだけ維持したかは、彼の健康状態と大いに関連してくるからである。1977年9月に当時の国連事務総長ワルトハイムとブレジネフとの会談に同席したシェフチェンコ(A.Шевченко)（当時、ソ連政府政治任命国連事務次長、グロムイコの元個人顧問）は、以下のように回想している[58]。

「大きな、よく磨かれ、整頓されたデスクを前に、いささかおぼつかなげに立ち上がり、われわれに挨拶したその人物は、明らかに病気だった。握手する時ですらこわばり、けいれんしているように見えた。共産世界で最も力あるこの政治家の目はどんよりしていた。アゴの状態が悪化し、痛みが起きていると言われていたが、恐らくはその痛みをとめるためだろう、多量の薬物投与が行われていることを示していた。71才の誕生日を間近にひかえたブレジネフは脈拍調整器と補聴器をつけていた。老齢からますます残酷な仕打ちを受けているような風に見えた。ブレジネフはわれわれの正面に座ったが、彼の発言には活気も力強さもなかった。用意されたメモをたどたどしく読み上げたが、目は訪問客よりメモのページに向けられる方が多かった。グロムイコが数日前、ワルトハイムを前に使ったのとほとんど変わらない、退屈な言い回しで、ブレジネフは国際問題に関するソ連の見解を読み上げた。紋切り型の言葉だっ

た。話しぶりには抑揚がなく、まるでロボットが話しているようだった」

また、「クレムリン・ドクター」だったエフゲニー・チャゾフは、以下のように回想している。

「医師達は、ブレジネフは脳の血行障害をおこしていると見ていた。この頃から［金成浩注：ウラジオストクでフォードと会談を行った74年11月のこと］、ブレジネフの病状は進んでいった。……ブレジネフはますます批評分析能力を失っていた。彼の労働能力は低下し、精力的に働くことは難しくなった。声のとぎれがかなり継続的に起こるようになり、深刻になっていった。1975年にはそれらを隠すことは難しくなった。」（下線は金成浩）(59)

さらに、チャゾフは、アフガニスタン侵攻直前の79年11月に、ブレジネフが東ドイツを訪問した時の模様を以下のように述べている。

「……ブレジネフは大会の午前中、東ドイツ30周年を祝う演説をしなければならなかった。痛みを和らげるためと眠るために、ブレジネフは演説の前日の夜、自分の虚弱を顧みずに、誰か友人の助言で睡眠薬を飲んだ。その薬が彼にとっては強すぎたのか、朝、彼は目が覚めたが起き上がることはできなかった。私が彼のところに行った時、彼は不安げに一言話した。『エフゲニー、私は歩けない。足が動かない。』演説まで1時間しかなかった。我々は回復するよう手を尽くしたが、効果はなかった。すでに車は宿舎の前に並んでおり、我々を待っていた。グロムイコと代表団の他のメンバーは、通りへ出ていらいらして大会に遅れることを心配していた。我々は何もできなかった。マッサージも刺激剤も効果がなかった。もし30分後に我々が現れなかったら、大会へ出発して、次の行動をどうするか決定するよう私は提案した。我々医師達と同じく警備隊は状況を心配した。我々は、ブレジネフを通りに連れ出し、庭で彼を歩かせることを試みることにした。ブレジネフにはまだ驚くべき力が残っていた。宿舎から我々は文字通り彼を引っ張りだし、1人で歩いてみることを進言した。彼は自分で歩きだし、車に座り大会に出発した。」(60)

以上見てきたように、ブレジネフが脳の血行障害をおこし批判分析能力が低下していたこと、さらに、アフガニスタン介入決定前の健康状態がかなり悪かったことを考慮すると、ブレジネフがアフガニスタン侵攻決定に積極的なイニシアチブをとったとは考えにくい。

(2)　グロムイコ

グロムイコは、職業外交官として一貫してソ連外交に携わってきた。しかも、外相になるまでの外交官としてのグロムイコのキャリアの中で、対米外交に携わってきたキャリアの長いことが注目に値する。1939年から43年にかけて外務人民委員部米国局次長、局長、および駐米ソ連大使館参事官、43年からは駐米大使、46年からは国連安保理常任代表および外務次官、49年から外務第一次官、52年から53年には駐英大使、外務第一次官、57年から85年まで外相を務めた。この経歴からもグロムイコが米国との外交に関係してきた

キャリアが長いことが分かるが、グロムイコに対する部下からの評価は、グロムイコの外交スタイルは対米中心であるということで一致している。グロムイコの顧問も務めたシェフチェンコは、こう述べている。

「グロムイコは多くの点で、正統的共産党員である。にもかかわらず、彼は将来にわたるソ米関係の重要性に関しては、ソ連や西側の多くの人より長期的展望に立つ。彼のもとで働いていた当時、彼が関心を持ち、活躍する主要かつ特別な分野はソ米関係だと私は考えていた。アメリカやアメリカ国民に対して、彼と同世代の多くのソ連政治家や一部の若い人達が反射的に見せる嫌悪の情を、グロムイコが見せたことは私の知る限り一度もなかった。彼はアメリカをその力と潜在力の点から、国際舞台におけるソ連の好敵手と評価する。彼は政治局の多くの同僚と同様、アメリカの力をあなどっていない。彼が親米派というわけではない。他のソ連の指導者と違って、彼はアメリカが単にソ連の主要相手国というだけではなく、両国の利害が一時的であれ、長期的であれ、類似し、もしくは合致する限り、パートナーであるともみている。この点でのグロムイコの基本的姿勢は変わっていないと考えている。グロムイコの世界情勢に対する取り組み方には、典型的な勢力均衡の政策が多分にみられる。彼は常にソ連の利益を粘り強くかつ巧妙に追究する弁護士のような人物であり、その上、戦術上必要となれば、西側の利益さえも喜んで考慮する。ソ米関係、ヨーロッパ情勢とくにドイツ、フランス情勢、軍備管理とSALTなどに関するグロムイコの見解は、ソ連の外交政策の大筋に大きな影響を与えている。グロムイコがかつてのアメリカとの緊張緩和を構築した主要な人物であり、今でも、現在の他の政治局員より強く緊張緩和を支持していることを記憶にとどめるべきである。彼は今は故人となったコチコチの反米派であるアンドレイ・グレチコ国防相と緊張緩和や第一次SALT交渉をめぐって衝突し、そのあげく、2人は何週間もお互い口をきかないということもたびたびあったほどだ。……グロムイコの側近達も、アメリカもしくは西欧に精力を集中してきた。グロムイコは、長年来の部下で、アメリカが専門分野であるゲオルギー・コルニエンコを第一次官に昇格させた。彼の配下で腹心の1人に、ヨーロッパ問題を手がけてきたアナートリー・コワリョフ次官がいる。最近では、やはり外務省アメリカ局長の経験があるビクトル・コンプレクトフがグロムイコの次官として、腹心グループに加わった。……数限りなく招待を受けながら、グロムイコはブラック・アフリカ諸国を一度も訪問したことがない。キューバを例外として、ラテン・アメリカ諸国へ足を伸ばしたこともない。中国に関心をもつのは、モスクワ＝ワシントン＝北京関係というプリズムを通してだけだった。彼は我々スタッフと話していて、こうした招待を断る理由を、いつもこう説明していた。『なぜ、私にいく必要があるのかね。何を協議しようというのか。ナイジェリア（どこの国でもいいのだが）はアメリカほどの大国ではないよ。』」(61)

また、元ソ連外務省顧問で特命全権大使だったアレクサンドロフ＝アゲントフは、以下のように述べている。

「スターリン時代以来、グロムイコは米国との関係が最重要であることを認識していた。とりわけ、軍縮の分野ではそうだった。グロムイコはいつも対米外交の分野で懸命に働いた。彼

はアフリカやラテンアメリカの国家をはじめとして、同盟国の社会主義諸国および極東やアジアの諸国にもほとんど興味を示さなかった。グロムイコが好んだ言葉を使えば、『それらは趣味ではない』ということだった。」[62]

また、現ロシア外務省次官パノフも、グロムイコは日本への関心を示さなかったとしている[63]。

1970年代のグロムイコ外相時代に締結したデタント関連の条約は相当数になる。また、ソ連外務省外交官たちの証言で示唆されたように、グロムイコの外交スタイルは「対米中心主義」とも言えるが、このグロムイコがデタント時代の成果と対米関係をまったく考慮せず、アフガニスタンへの侵攻を決定したとは考えにくい。これに対して、「ソ連は、アフガニスタン侵攻を米国は黙認すると誤認したのではないか」という反論があるが、本稿「組織レベルの分析」で明らかになったように、当初侵攻に反対していたソ連指導部の理由は「アフガニスタンへの侵攻は国際的環境を複雑にする」「ソ連の国際的権威を傷つけ、軍縮のプロセスを後退させる」ということであり、アフガニスタン介入が及ぼす対米関係の悪化をソ連は十分に考慮していたといわざるをえない。さらに、当時の政治局内での外交問題におけるグロムイコの発言力の強さを考慮すれば、なおさら、米国の出方や対応は十分に政治局内で議論されたにちがいない。

では、グロムイコが対外政策決定の中心的立場にいながら、アフガニスタン侵攻が決定されたのはなぜか。これに対しては以下の解釈が可能である。ソ連は79年12月の時点で対米関係はすでに修復不能になっていると認識していた。すなわち、米国のデタント政策はすでに変更されていて、侵攻による対米関係の悪化もやむえないとソ連指導部はみていたのではないかということである。これは本稿「国際関係レベルの分析」の「仮説4：米国のデタント政策転換要因説」と同じ見解でもある。さらに、クレムリンでアフガニスタン介入の最終決定が行われた12月12日午後は、NATO閣僚理事会が、パーシングIIミサイルと地上発射巡航ミサイルGLCMを欧州に配備することを決定したのと同じ日である。このことは、アフガニスタン軍事介入に対米関係が大きく影を落としていることを示唆しているようでもある。

(3)　アンドロポフ

アンドロポフの経歴で注目される点は、54年から57年にハンガリー大使を経験していることである。56年のハンガリー動乱を経験したアンドロポフは、アフガニスタン介入に対してもハンガリーでの経験を参考にした可能性がある。これに関しては、前述したとおり、アンドロポフはアフガニスタン問題とハンガリー動乱との類似性によって介入反対の姿勢を変えたとする証言や介入決定前にはアンドロポフはかなり迷っていたとする証言（本稿「A．組織レベルでの分析(2) KGB」の項参照）がある。アンドロポフの外務省勤務の経歴と西側の情報に精通するKGB議長としての立場から判断すれば、グロムイコと同じくアフガニスタン侵攻に対する西側の反応を考慮した可能性が強い。ハンガリー動乱における西側の対応をアフガニスタンにおいても投影したことが、介入決定に傾く大きな要因となったと推測できる。

(4) ウスチノフ

ウスチノフの経歴は、スターリン政権以降の国防相の経歴と比較すればその特徴が明らかになる。

ウスチノフ以外の国防相は、全員、陸軍士官大学ないし参謀本部大学を卒業後、第二次世界大戦時には部隊を指揮したキャリアをもっており、戦後も一貫して軍事畑を歩いている。ウスチノフのみが職業軍人ではなく、彼のキャリアの大半は軍産複合体においてであり、さらに57年から76年までは軍事とは違う分野での経歴である。このことは、ウスチノフの軍事的戦略的判断能力に疑問を投げ掛けよう。アフガニスタン介入においても、その作戦の妥当性を軍事的戦略的観点からどれだけ考慮したかは疑問である。参謀本部のアフガニスタン介入に対する軍事的戦略的観点からの疑問を、ウスチノフが無視したこと(本稿「A. 組織レベルの分析」(3)軍の項参照) は、この疑問の裏付けになっている。

ウスチノフがなぜアフガニスタン介入に賛成したかは、組織レベルでの分析では明らかにはならなかったが、この個人レベルでの分析からではある程度アプローチが可能である。ウスチノフの経歴から判断して、アフガニスタン介入への熱意は、彼の出身母体である軍産複合体の利益の代弁に裏打ちされていたのではないかという見解が浮かび上がる。これは「なぜ、アフガニスタンに侵攻したか」という問いに新たな仮説を提起している。つまり、アフガニスタン侵攻決定の背後にウスチノフを通しての軍産複合体の圧力があったとする仮説である。この仮説の妥当性の検証は、時間的・資料的問題から今後の研究の課題としたい[(64)]。

(5) スースロフ

スースロフについては、シェフチェンコのスースロフ評が参考になると思われるので、少し長くなるが、紹介する[(65)]。

> 「……彼［スースロフ］は、スターリン時代から生き残っている最後の大物の一人で、ブレジネフの下でも権力を維持していた。彼は冷たく、厳密で、無愛想で、グロムイコとは疎遠で気まずい関係にあるのは私は知っていた。といって、2人は組み合わせの悪い仲間同志みたいに張り合っているわけではなかった。スースロフは1982年1月に79歳で死亡したが、共産主義の教義とその純粋な実践を最重要視した。グロムイコの方はもっと柔軟だが、ソ連の力の具現を唱える点ではひけをとらなかった。グロムイコは世界をあるがままに扱い、必ずしもマルクス・レーニン主義がそうあるべきだと宣言したことにはこだわらなかった。晩年は病気がちだったため、スースロフの日常の党務や党官僚の内部抗争で果たす役割はかなり限定されていたが、威力は依然巨大だった。そして自分の独断的見解を押しつけることまではしなかったが、少なくとも、自分がソ連の政策として適切だったと考える路線から逸脱するのを遅らせ、あるいは防ぐために、その威力を使うことはできた。6フィートを越す長身でやせていた。彼は1941年に中央委員会入りし、47年に党書記に、52年に党幹部会(政治局がこのように呼ばれていたスターリン時代最後の政治局)のメンバーになった。年功序列だけでも彼は有力者になっていただろうが、彼の政治的躍進は、自分より若い人間たちを長年にわたって昇進させてきたことの成果でもあった。引き上げられた人間は彼に頭が上がらず、忠実だった。フルシ

チョフが1964年に追放された時、スースロフは書記長になろうとすればなれたのだが、彼はイデオロギー問題に専念する方を選んだ。しかし、スースロフも彼の同僚も、自分達を支配することになるような人物を党の最高ポストにつけるのは嫌だった。だが、スースロフは、党の長老役、イデオロギーの純粋性の守護者としての役割に満足しているように見えた。無謬の法衣を身にまとったように、彼は、正しいマルクス・レーニン主義の政策の何たるかを思い起こさせる文書を規則的に出していた。……」

スースロフがイデオロギーの守護者的位置にいたとしているが、この見解は他の回想からも裏付けられている。例えば、彼は1968年の「プラハの春」では、チェコスロバキアの改革がイデオロギーに否定的結果を及ぼすことを強調し、教条主義的立場にたって意見を述べたらしい(66)。さらに、スースロフがアフガニスタン四月革命をイデオロギー的観点から積極的に承認することを主張したとする証言（「A．組織レベルの分析(4)党国際部」の項参照）もある。

これらを考慮すれば、アフガニスタン問題に関しても、同盟国へのイデオロギー的影響を懸念する意見をスースロフが述べたことが推測される。

(c)　政治局内での権力関係はどうなっていたか。

政治局内の権力関係の分析は資料の欠如のためその考察は難しいが、グロムイコの新回想録での彼の証言はアフガニスタン侵攻決定における政治局内の権力関係を、部分的であるが物語るものとなっているので紹介する(67)。

「アフガニスタンからの軍事援助の要請は、慎重に考慮された。最終的に、ソ連共産党政治局は一致してこの決定を採択した。この時、ソ連指導部は、侵略に対して援助を任意の国家に求めることができる権利を定めた国連憲章にしたがって、動いた。アフガニスタンからソ連に呼び掛けられた回数は、10に上った。援助を求めていたPDPA書記長タラキが殺害されたことは、緊急性を追加した。この血の行動は、ソ連指導部全員を驚かせた。ブレジネフはとくに彼の死を気に病んだ。最終的にこのような状況のもと、アフガニスタンへのソ連軍介入決定が行われた。政治局での決定の後で、私はブレジネフの執務室に立ち寄り、こう言った。

── われわれの軍事介入の決定を、国家手続きにしたがって正式手続きとしなくていいですか？

ブレジネフは直ぐには返事をしなかった。彼を受話器を取った。

── ミハイル・アンドレエヴィッチ、わたしのところに来ないか。相談したいことがあるので。

スースロフが現れた。ブレジネフはわれわれの話しをスースロフに伝えた。そして、自分から付け加えた。

── 複雑な状況にある。至急決定を採択する必要があるらしい。アフガニスタンの援助要請を無視するか、それとも、ソ連・アフガニスタン条約にもとづいて人民政権を救うよう行動するか？

スースロフは話した。

── われわれにはアフガニスタンとの条約がある。それにもとづいて、速やかに行動しなけれ

ばならない。すでに我々はこの決定を下した。中央委員会ではあとで審議すればよい。
その後、1980年6月の中央委員会総会で、政治局の決定が全会一致で採択された」

この回想において注目すべき点は、二つある。一つは、介入決定を正式なものとするかどうかについて、グロムイコがブレジネフの執務室に相談に行った点である。これはアフガニスタン問題においてグロムイコが総括的（中心的）立場に立っていたことを示している。さらに、第二は、ブレジネフがスースロフに相談していることである。これはさきのシェフチェンコの証言における政治局内でのスースロフの立場を裏付けてもおり、ブレジネフがアフガニスタン問題においてもスースロフの立場をかなり尊重していたこと、また、最終決定においてスースロフからのアドバイスがあったことを示している。

III. 結　論

第1節　アフガニスタン侵攻における政策決定過程

アフガニスタン侵攻における政策決定過程は、主に第2章の組織レベルからの分析によって導かれたものである。以下、その分析結果をまとめる。

アフガニスタンには、ソ連外務省・KGB・軍・党国際部から要員が派遣されていた。この4者の中で中心的位置にあったのは、外務省派遣の駐在大使であった。駐在大使は、KGB代表および軍事顧問団長とともに、アミンやタラキとの交渉を行った。また、駐在大使・KGB代表・軍事顧問団長によって、アフガニスタンの国内情勢およびアフガニスタン指導部の状況が、政治局「アフガニスタン委員会」に報告された。だが、アミンによるタラキ殺害後、プザノフからタベーエフに大使が代わった後は主にKGB代表と軍事顧問団長がアミンとの会談にあたったようである。また、党国際部は、アフガニスタンで共産革命が起こった78年4月からその役割を増大させたものの、外務省・KGB・軍を越える役割を演じることはなかったとみられる。

政治局では、ダウド政権が成立した1973年あたりから、アフガニスタン情勢についての非公式な会合がもたれていた。この会合が公式化されたのが、政治局「アフガニスタン委員会」である。公式化されたのは、おそらく、79年春から夏であったろうとみられる。その構成メンバーはグロムイコ・アンドロポフ・ウスチノフ・ポノマリョフで、必要に応じて各機関のナンバー2にあたる外務第一次官コルニエンコ・軍参謀総長オガルコフなどが出席した。また、現地の責任者であるゴレロフ軍事顧問団長・イワノフKGB将校らが直接モスクワに召喚され、「アフガニスタン委員会」で報告する時もあった。ここでの討議によって提言された内容が、政治局定例会議の承認を経て正式決定とされた。この「アフガニスタン委員会」が、ソ連の対アフガニスタン政策において重要な役割をはたしていたものとみられる。また、「アフガニスタン委員会」で中心的役割を担っていたのはグロムイコで、彼が直接アフガニスタン駐在の大使・KGB代表・軍事顧問長に指示を出すこともあった。アフガニスタン侵攻の最終決定が行われたのは、12月12日午後であったとみられる。この決定に参加したのはブレジネフ・グロムイコ・アンドロポフ・ウスチノフ・スースロフ（コスイギンは不明）で、14名いる政治局員の内5名（コスイギンを含めれば6名）の政治局

員のみで決定された。この最終決定時における公式文書は公表されていないのでこの時の討議内容は定かではない。だが、ブレジネフの悪い健康状態を考慮すれば、「アフガニスタン委員会」メンバーのグロムイコ・アンドロポフ・ウスチノフの3人がイニシアチブをとり、ブレジネフの承認を取りつけたと推測される。さらに、この3人の中で誰が最初に発案したかについてはまだ明確でないが、アンドロポフかウスチノフのどちらかであるとみられる。このうちのどちらかが主導権のあるグロムイコを巻き込んで、介入決定の提言を上申したようである。なお、この12月12日の介入決定は非公式な秘密会議で行われたもので、この決定が正式決定とされたのはアフガニスタン侵攻6ヵ月後の80年6月であった。

第2節　アフガニスタン侵攻における政策決定要因

前述したように、最終決定での会議の文書は公表されていない。この会議が非公式の秘密会議であったため、議事録は存在していないのではないかとみられる。また、この会議に同席していたとされるメンバーは全員がすでに死亡しているため、介入を決定づけた意見を特定する文書の入手は困難とみられる。そのため、前述の三つのアプローチを総合的に判断して介入決定要因を推定するしかないと思われる。

「国際関係レベルでの分析」において、筆者は仮説3・4・5の妥当性を指摘した。まず、仮説3（反ソ戦線形成懸念説）の妥当性は、アフガニスタン問題においてグロムイコが主導権をにぎっていたという事実(組織レベルの分析)、および、グロムイコが対米重視の外交スタイルであったという結論（個人レベルの分析）によって、補強された。すなわち、アフガニスタン問題においてソ連の計算を大きく左右したのは、まさに米国の動きであった。よって、アミン政権のままでは米国によってアフガニスタンは反ソ基地にされてしまうというソ連指導部の懸念が、介入決定の一要因となったとすることは妥当であるといえよう。

また、仮説4（米国のデタント政策転換要因説）は、軍縮プロセス後退への懸念が当初のアフガン不介入方針の理由であったこと(組織レベルの分析、資料1)、アフガニスタン問題においてグロムイコが主導権をにぎっていたという事実(組織レベルの分析)、グロムイコが対米重視の外交スタイルであったという結論（個人レベルの分析）によって、補強された。すなわち、対米中心のグロムイコが介入反対にまわらなかったのは、米国のデタント路線はすでに変化しており、アフガニスタン侵攻を思い止どまったとしても米国との関係改善の余地はもはや存在しないという判断にあったためと見られる。

さらに仮説5（同盟国へのイデオロギー的影響懸念説）の妥当性も、スースロフが決定に関与していたこと(組織レベルの分析)、および、スースロフがイデオロギーの守護者的位置にいたという事実（個人レベルの分析）によって補強されたといえる。すなわち、アフガニスタンでのイデオロギー的敗退は他の同盟諸国へ及ぼす影響がはかり知れないという考えが、介入決定の一要因になったということである。

また、「国際関係レベルの分析」でその妥当性を疑問視した仮説1（石油獲得による西側への攻勢説)、仮説2（イスラム革命のソ連国内波及懸念説）は、ソ連がアフガニスタン侵攻を西側への攻勢の布石とみなした様子がないこと（組織レベルの分析、資料1-15）およ

び、イスラム革命の自国への飛び火を懸念した様子もないこと（組織レベルの分析、資料1-15）が判明したことによって、その不適切性が裏付けられた。

では、妥当性が補強された上記仮説3・4・5の中でどれがアフガニスタン侵攻における主要因となるのであろうか。これら複数の要因から主要因を特定することは「国際関係レベルの分析」からは困難であったが、「組織レベルの分析」と「個人レベルの分析」によって、ある程度可能となった。つまり、グロムイコが「アフガニスタン委員会」という実務レベルの中心であったこと、スースロフはこのアフガニスタン委員会のメンバーではなかったこと、また、アフガニスタン委員会でイデオロギー的影響の懸念を述べた可能性が高いのはポノマリョフだが、ポノマリョフはアフガニスタン委員会でも最低位の立場にあったこと、最終決定レベルでスースロフは参加してその影響力を行使したのみであったことを考慮すれば、仮説5は仮説3や4と比較して副次的要因であったといえるだろう。

まとめれば、アフガニスタン侵攻決定の要因（理由）には三つある。

① アミン政権のままでは、アフガニスタンは米国によって反ソ基地に変貌してしまうという懸念。

② 米国のデタント路線はすでに変化しており、アフガニスタン侵攻による米国との関係悪化もやむをえないという判断。

③ 反革命によるアフガニスタンでの共産政権の崩壊が、アフガニスタン自身に止まらず他の同盟国にもイデオロギー的動揺を与えることへの懸念。

上記において、主要因は①と②であり、③は副次的要因であったといえる。

なお、「個人レベルの分析」において提起された「ウスチノフが軍産複合体の利益を代弁し、それがアフガニスタン介入の一要因になった」とする新たな仮説の妥当性については、今後の研究課題としたい。

— 注 —

1 Эдуард Шеварнадзе, *Мой выбор*, Москва, Новости, 1991, стр. 110.（邦訳：エドアルド・シェワルナゼ『希望』朝日新聞社、1991年、105頁）

2 Г.Ф. Кривошеев (ред.), *Гриф секретности снят: потери Вооруженных Сил СССР в войнах, боевых действиях и военных конфликтах*, Москва, Военное Издательство, 1993, стр. 402.

3 従来研究で代表的なものとしては、Jiri Valenta, "From Prague to Kabul: The Soviet Style of Invasion," *International Security*, Fall 1980, pp. 114-141；フレッド・ハリデー『危機の三日月地帯―ソ連脅威論の検証』新評論、1983年；エレーヌ・カレール＝ダンコース『パックス・ソビエチカ―ソ連の対第三世界戦略』新評論、1987年、256-322頁；Mark Urban, *War in Afghanistan* (second edit.), London, The Macmillan Press, 1990; Milan Hauner, *The Soviet War in Afghanistan: patterns of Russian Imperialism*, Philadelphia, University Press of America, 1991. などがある。また、日本人による研究としては、鳥井順『アフガン戦争』第三書簡、1991年、があるが、軍事的観点からの研究である。なお、アフガニスタン侵攻政策決定過程にも比較的詳

しい研究としては、Anthony Arnold, *The Fateful Pebble: Afghanistan's Role in the Fall of the Soviet Empire*, California, Presidio Press, 1993; Raymond L. Garthoff, *Detente and Confrontation: American-Soviet Relations from Nixon to Regan* (revised eidtion), Washington, The Brookings Institution, pp. 1023-1046. がある。

4 衛頭瀋吉、渡辺昭夫、公文俊平、平野健一郎（編）『国際関係論』第2版、東京大学出版会、1989年、67頁。

5 グレアム・T・アリソン『決定の本質：キューバ・ミサイル危機の分析』中央公論社、1977年。

6 Jiri Valenta, *Soviet Intervention in Czechoslovakia, 1968: Anatomy of a Decision* (revised edition), Baltimore, Johns Hopkins University Press, 1991, pp. 2-8.

7 鳥井順、前掲書、73-74頁。

8 柳沢栄二郎『戦後国際政治史III』柘植書房、1987年、177頁。

9 柳沢、前掲書、180頁。

10 アダム・ウラム「イスラム世界と中近東への対応」『ソビエト・マニュアル（下）』ジョージタウン戦略研究所編、PHP研究所、1984年、327頁。ウラムも同様の論理を展開している。

11 この説を主張するものに以下がある。小杉泰「アフガニスタンの炎：イスラーム闘争の広がり」石田進（編）『中央アジア・旧ソ連：イスラーム諸国の読み方』ダイヤモンド社、1994年、76頁、など。

12 この説を主張する研究に以下がある。フレッド・ハリデー『危機の三日月地帯：ソ連脅威論の論証』新評論、1983年；Melvin A. Goodman, "Foreign Policy and Decision-Making Process in the Soviet Union," in Hafeez Malik (ed)., *Domestic Determinants of Soviet Foreign Policy towards South Asia and the Middle East*, Hampshire, The Macmillan Press, 1990, p. 99.

13 例えばValenta, "From Prague to Kabul: The Soviet Style of Invasion," p. 129.

14 ゲオルギー・アルバトフ『ソ連の立場』サイマル出版会、1983年、45-46頁。

15 ウラム、前掲書、326頁。

16 ダンコース、前掲書、292頁。

17 集団指導制については以下を参照。エレーヌ・カレール＝ダンコース『奪われた権力：ソ連における統治者と被統治者』新評論、1987年、126-149頁。

18 ［資料1］から［資料15］は、日本では初出である。

19 Cold War International History Project, *Bulletin*, Woodrow Wilson Center, Fall 1993, pp. 67-69.より抜粋翻訳。

20 Н.И. Пиков (ред.), *Война в Афганистане*, Москва, Военное Издательство, 1991, стр. 203. より翻訳。

Война в Афганистане はソ連国防省軍事史研究所の編集によるアフガニスタン戦争の研究書である。本書出所の以下の全資料は、ソ連軍参謀本部歴史文書課に保管されていたものとされている。

21 *Труд*, 23 июня 1992.

22 Н.И. Пиков, указ. соч., стр. 204.

23 Там же., стр. 205.

24 Там же. なお、*Красная Звезда,* 18 октября 1989. にも同文書が掲載されている。

25 Н.И. Пиков, *указ. соч.*, стр. 205.

26 Там же, стр. 207. なお、*Красная Звезда,* 18 октября 1989. にも同文書が掲載されている。

27 Н.И. Пиков, *указ. соч.*, стр. 208.

28 Там же. なお、Николай Иванов, "Шторм-333," *Наш Современник*, No. 9, 1991. にも同文書が掲載されている。

29 *Труд,* 23 июня 1992.

30 Н.И. Пиков, *указ. соч.*, стр. 209.

31 Там же. なお、*Красная Звезда,* 18 октября 1989. にも同文書が掲載されている。

32 *Труд,* 23 июня 1992.

33 Cold War International History Project, *Bulletin*, Woodrow Wilson Center, Fall 1994, p. 76. より抜粋翻訳。

34 С.Ф. Ахромеев, Г.М. Корниенко, *Глазами Маршала и Дипломата,* Москва, Издательство Международные Отношения, 1992, стр. 15.

35 Кристофер Эндрю, Олег Гордиевский, *КГБ: История Внешнеполитических Операций от Ленина до Горбачева,* Москва, Издательство Nota Bene, 1992, стр. 579. (邦訳：クリストファー・アンドルー、オレグ・ゴルジエフスキー『KGB の内幕：レーニンからゴルバチョフまでの対外工作の歴史』文芸春秋社、1993 年、294 頁)

36 *Московские Новости,* No. 25, 24 июня 1990, стр. 11.

37 Артем Боровик, "Спрятанная Война," *Огонёк*, No. 46, ноябрь 1989, стр. 19.

38 エフゲニー・チャゾフの経歴については以下のとおり。

1929 年 6 月 1 日生。ロシア人。

前ソ連保健大臣兼全ソ心臓医学センター総長。国家賞受賞(1969、76 年)、ソ連医学アカデミー会員(1971 年)、社会主義労働英雄(1978 年)、ソ連科学アカデミー会員(1979 年)、レーニン賞受賞 (1982 年)。

1953 年キエフ医科大学卒業。1964 年医学博士。1965 年教授。1953 年—57 年モスクワ第一医科大学内科クリニック医局員。1957 年—67 年ソ連医学アカデミー心臓医学研究所研究助手、上級研究員、次長、所長。1962 年入党。1967 年 1 月—ソ連保健省総局長。1968 年 6 月—87 年 2 月 17 日同次官。1975 年—全ソ心臓医学センター総長。1981 年 3 月 3 日—ソ連共産党中央委員候補。1982 年 5 月 24 日—90 年 7 月 13 日同中央委員。1987 年 2 月 17 日—90 年 3 月 29 日ソ連保健大臣。1988 年 11 月 28 日—ソ連共産党中央委社会・経済政策委員。

39 Евгений Чазов, *Здоровье и Власть: Воспоминания Кремлевского Врача,* Москва, Издательство Новости, 1992, стр. 152.

40 А.С. Черняев, *Шесть Лет с Горбачевым: по Дневниковым Записям*, Москва, Издательская группа Прогресс, 1993, стр. 38.

(邦訳：アナトーリー・チェルニャーエフ『ゴルバチョフと運命をともにした2000日』潮出版社、1994年、49頁)

41 Н.И. Пиков, *указ. соч.*, стр. 212. および、*Красная Звезда,* 18 октября 1989.

42 Н.И. Пиков, Там же, стр. 212. および、*Красная Звезда,* 18 октября 1989.

43 Артем Боровик, *указ. соч.*, стр. 19.

44 Г.М. Корниенко, "Как принимались решения о вводе советских войск в Афганистан и их выводе," *Новая Новейшая История*, No. 3, 1993, стр. 110.

45 С.Ф. Ахромеев, Г.М. Корниенко, *указ. соч.*, стр. 172.

46 "Кабульский резидент," *Новое Время*, No. 38, 1991, стр. 38.

47 Кристофер Эндрю, Олег Гордиевский, *указ. соч.*, стр. 579.
(邦訳：クリストファー・アンドルー、オレグ・ゴルジエフスキー、前掲書、295頁)

48 Г.М. Корниенко, *указ.соч.*, стр. 110.

49 Там же, стр. 109.

50 政治局内でのオーガニゼーショナル・コンプロマイズのために、「委員会」が存在したとする研究に、横手慎二教授（慶応大学）の日本国際文化研究センター（94年6月3日）での発表がある。横手教授は、「中国委員会」(1920年代)、「モンゴル委員会」(1930年代)、ポーランド問題を討議した「スースロフ委員会」(1980年代）の存在を指摘した。

51 *Красная Звезда,* 18 октября 1989.

52 Николай Иванов, *указ. соч.*, стр. 148.

53 Г.М. Корниенко, *указ. соч.*, стр. 109.

54 А.С. Черняев, *указ. соч.*, стр. 38. (邦訳　チェルニャーエフ、前掲書、49頁)

55 Г.М. Корниенко, *указ. соч.*, стр. 108-111.　コルニエンコは、「アフガニスタン委員会」にも参加していたため、その証言の信憑性は高いと思われる。

56 他に12月12日とする文献に、Н.И. Пиков, *указ. соч.*, стр. 211.、および、*Красная Звезда,* 18 октября 1989.　がある。一方、ゲオルギー・アルバトフは、『アガニョーク』誌のインタビューで、12月13日としている（Артем Боровик, *указ. соч.*)

57 *Вестник министерства иностранных дел СССР,* No. 2 (60), 31 января 1990, стр. 14-15. および、*Правда,* 25 декабря 1989. なお、人民代議員大会は、国際問題委の報告を受けて、アフガニスタン介入が「道徳的および政治的非難に値する」と決議した(*Ведомости съезда народных депутатов СССР и верховного совета СССР,* No. 29, 27 декабря 1989)。

58 アルカジー・シェフチェンコ『モスクワとの訣別』読売新聞社、1985年、380-381頁。シェフチェンコの回想録は出版当初その信憑性が議論されたが、『ワシントン・ポスト』紙は、チェックできる限りでは本書の内容は全体で正確だとしている。本稿においても、ブレジネフの健康状態やグロムイコ評など他の回想録の証言と一致している。

59 Евгений Чазов, *указ. соч.*, стр. 129.

60 Там же, стр. 149-150.

61 シェフチェンコ、前掲書、199-200頁。

62 Andrei Alexandrov-Agentov, "Foreign Minister Gromyko," *International Affairs*, Moscow, August 1991, p. 105.

63 アレクサンドル・パノフ『不信から信頼へ：北方領土交渉の内幕』サイマル出版会、1992年、21頁。

64 例えば、1976年のウスチノフの国防相就任は、軍産複合体の発言力の増大につながったとする見解がある。*cf.* Julian Cooper, "The Defense Industry and Civil-Military Relations," in: Timothy J. Colton and Thane Gustafson (ed)., *Soldiers and Soviet State: Civil-Military Relations from Brezhnev to Gorbachev*, Princeton, Prinston University Press, 1990, p. 171. また、1994年のロシア軍のチェチェン介入の場合、エリツィン大統領の介入決断の背後に、自らの威信回復をはかろうとするグラチョフ国防大臣や軍産複合体の利益を代弁するソスコベツ第一副首相の圧力があったとする報道がある。(『朝日新聞』 1995. 2 .15)

65 シェフチェンコ、前掲書、278-280頁。

66 *Новое Время,* No. 16 1992, стр. 39.

67 Н.И. Пиков, *указ. соч.*, стр. 191-192. グロムイコは以前回想録を記しているが、アフガニスタン問題についての記述を避けているという批判がでたため、この部分についての回想をあらたに書いている。なお、日本で翻訳出版された回想録『グロムイコ回想録 ── ソ連外交秘史 ──』(読売新聞社、1989年)は旧回想録の翻訳である。本文の引用はН.И. Пиков (ред.), *Война в Афганистане* からの間接的引用によるものである。

The Soviet Invasion of Afghanistan
—— Anatomy of Decision Making in Foreign Policy ——

Sung-Ho KIM

The purpose of this study is to analyze the cause of decision making and the decision making process leading to the the Soviet invasion of Afghanistan in 1979. In this study, I will develop an analysis which operates on three levels. First, there is the level of international relations. Second, we will discuss the level of domestic organization and finally, we will deal with the level of decision-makers.

1. Analysis on Level of International Relations.

In this analysis, a hypothesis will be based on specifying the interest of the Soviet Union for conducting its invasion of Afghanistan. In addition, it will be shown that the Soviet invasion of Afghanistan was a logical step in pursuing a national interest. The background for our analysis will be the international political situation at the time of the invasion. Furthermore, this analysis proposes three hypotheses for explaining the causes that determined the decisions made by the Soviet Union when it invaded Afghanistan. These three hypotheses can be summed up as follows: (1) The Soviet Union feared that Afghanistan at the south of its borders would become a base for the US to conduct anti-Soviet activities. (2) Both the Soviet Union and US had already abandoned their foreign policy of détente. Therefore, the Soviet Union assumed that any further aggravation of the US-Soviet relations due to a Soviet invasion of Afghanistan would not have any serious political repercussions. (3) The Soviet Union feared that the collapse of the communist government in Afghanistan would cause a detrimental ideological influence on its allies. In order to decide whether or not these three hypotheses can be adopted as an explanatory tool, or which of the hypotheses is most important, it becomes necessary to analyze them on the level of domestic organization and the level of decision makers.

2. Analysis on the Domestic Organization Level.

This analysis assumes that Soviet foreign policy actions result from a process of political interaction ("pulling and hauling") by domestic organizations. This political process is determined by answers to the following questions: What information and suggestions were reported by each domestic organization (e.g. the Ministry of Foreign Affairs, the KGB, the Ministry of Defence, the International Department of the Communist Party etc.) that influenced the decision making process leading to the invasion of Afghanistan? How did these domestic organizations relate to one another? How did the Politburo sort out the ideological differences of opinion between organiza-

tions? Our analysis of Soviet domestic organizations in relation to the decision making process that led to the invasion of Afghanistan is based on originally secret material that were published after the collapse of the Soviet Union.

The result of our analysis can be summed up as follows: (1) The Ministry of Foreign Affairs, the KGB, and the Ministry of Defence had been active in Afghanistan. Among these, the Ministry of Foreign Affairs assumed a leading role in Afghanistan. (2) In the Politburo, the "Afghanistan Commission" was formed. Its main members were the Foreign Minister Gromyko, the KGB chief Andropov, and the Defence Minister Ustinov. Sometimes the chief of the International Department, Ponomarev, joined them. Those who were second in charge in each organization (e.g. the chief of the General Staff Office N. Ogarkov, the Vice-Minister of Foreign Affairs G. Kornienko etc.) were invited when needed. According to our analysis, it is highly probable that the "Afghanistan Commission" presented suggestions to the Politburo and they became formal decisions through the approval process in regular Politburo meetings. Furthermore, there is evidence that Andrei Gromyko played an important role in the "Afghanistan Commission." (3) The decisions to invade Afghanistan was made on Dec. 12 1979 by only five men: Brezhnev, Gromyko, Andropov, Ustinov and Suslov.

3. Analysis on the Decision-makers Level.

This analysis assumes that Soviet foreign policy decisions result from a process of political interaction ("pulling and hauling") by the decision-makers. One can understand this process by finding answers to the following questions: What motivation did the five men have when considering the invasion? What kind of personality did these leaders have when their career background taken into account?

Our analysis shows the following results: (1) Brezhnev: The condition of his health was quite serious. Therefore he could not assume an active role in the decision making process with regard to the invasion of Afghanistan. (2) Gromyko: He regarded the foreign policy towards the US as most important because he had a long experience in the US as a diplomat. It seems that Gromyko decided for the invasion based on an underestimation of US reaction. (3) Andropov: He drew parallels between the intended invasion of Afghanistan and the invasion of Hungary in 1956. It seems that Andropov assumed a similar reaction of the US, thus casting his vote in favor of the invasion. (4) Ustinov: He probably defended the interest of the Soviet arms industry, since he was involved in its development.

The conclusion of our study shows that the three initial hypotheses as postulated by the analysis on the level of international relations find consistent support by the other two analyses, e.g. that on the level of domestic organization and on the decision-maker's level. In other words, the results of our study confirm that the three hypoth-

eses describing the causes for the decisions leading to the Soviet invasion of Afghanistan can indeed be used as an explanatory tool for that political event by virtue of supportive arguments from the above mentioned two analyses. In order to facilitate the presentation of our concluding reflections, we list below the three initial hypotheses.

[1] The Soviet Union feared that Afghanistan would be used by the US for anti-Soviet activities.

[2] The Soviet Union considered the invasion of Afghanistan as unimportant for US-Soviet relations.

[3] The Soviet Union feared ideological repercussions among its allies if the communist government in Afghanistan would collapse.

Our study has shown that the "American factor" as represented by the above hypotheses [1] and [2] is reinforced by two findings. First, one of the main persons in the "Afghanistan Commission" was identified as Gromyko who exerted the influence on the decision making process. This is the result from the analysis on the domestic organization level. Second, Gromyko regarded the Soviet foreign policy towards the US as most important, a fact which has been confirmed by our analysis on the decision maker's level.

In addition, the "ideological factor" as defined by the above mentioned hypothesis [3] has been supported by two points. First, Suslov appeared as a confident of Gromyko, thus being involved in the decision making process related to the invasion. This has been confirmed by our analysis on the domestic organization level. Second, Suslov feared the detrimental ideological influence on Soviet allies in case the communist government in Afghanistan would collapse. This finding resulted from the analysis on the decision maker's level.

And we should point out that our study ascribes primary importance to the hypotheses [1] and [2], because Gromyko played an important part in making a compromise in Politburo.